

地域と農業

会報

第 52 号

Jan. 2004

Winter

特集

座談会「地域農業の未来と女性の役割」

ご宿泊のご用命は是非当会館へ!!

10月より
新企画スタート!

「GOGO割引」で
大変お得!

2人1室のご利用で税込み素泊り お一人様

なんと**2,400**円から

☆ツインは2人、和室は2人以上の利用でお一人様**2,400**円から!

電話で、お泊まりの1週間前までにご予約を。簡単なアンケートにお答えを! なお、部屋数に限りがありますので、ご予約はお早めに! 平成16年5月31日まで実施します。土曜日と月曜日が休日の日曜日、雪まつり期間、ゴールデンウィークは除外日とします。

ほかの割引制度との併用は不可。支払いはキャッシュのみです。

ホテルノースイン札幌

宿泊・会議室・さわやかサウナ  北農健保会館

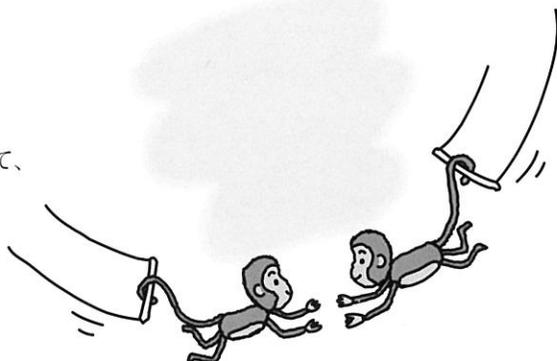
電話ご予約 **011-261-3270**

〒060-0004 札幌市中央区北4条西7丁目
<http://www.hokunoukenpo.or.jp/kaikan/>

信頼を築く、力

チャレンジ
2004

コミュニケーション・パワーは、
確かな信頼関係から生まれます。
私たちは、ここぞという時に頼れるパートナーとして、
さらなる進化を目指します。



印刷文化を通じて地域社会に貢献

株式会社 **須田義版**
<http://www.suda.co.jp>

札幌市西区二十四軒2条6丁目
☎(011)621-0275
旭川・釧路・苫小牧・滝川・東京・埼玉



ISO14001 認証取得
EC03J0123

地域と農業

Vol.52

表紙写真：冬の羊蹄山
提供：山田 精一



— 目 次 —

2

みる
観 察

自由貿易体制下の「苦悩する農業」
どうなる自給率向上

専務理事 宮田 義行

4

特 集

座談会
「地域農業の未来と女性の役割」

「食農わくわくねっとわーく」事務局長 長尾 道子

蘭越町農業経営(野菜) 及川かをり

愛別町農業経営(酪農) 藤原 幸子

コーディネーター
(社)地域農業研究所所長 太田原高昭

29

ときの話

あなたはこう見る「母ちゃんパワー」

禿 老 児

33

Essay

「農業は感動産業です」—最終回—

蘭越町 農業 及川かをり

39

連載 No.35

あのマチこのムラ地域おこし活躍中
月形町の事例

特別研究員 佐々木正幸

49

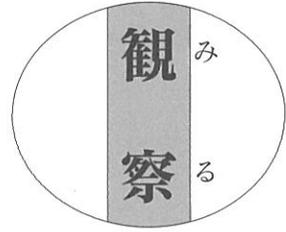
つれづれ

一本の庭木が偲ばせてくれたこと

きたのだいち

51

掲示板・DATA FILE



自由貿易体制下の「苦悩する農業」、 どうなる自給率向上

(社)北海道地域農業研究所
専務理事

宮田 義行

昨年は平成五年以来の冷夏となり、米は大凶作さらに台風一〇号、十勝沖地震と相次ぐ災害に見舞われ大変厳しい一年であった。また日本経済の回復基調を実感するに至らぬまま、構造改革の「いたみ」がいたるところに現れてきた一年でもあった。

WTO一括合意も頓挫し、仕切り直しとなったが日本にとつて状況が良くなったわけでもない。FTA(自由貿易協定)の動きが加速する中で、首相が日本の現状認識として「農業鎖国」という発言をするようでは日本の外交交渉はスタートから腰砕けのようなものである。

食料という国の基本に関わる国内農業を、国はどのように位置付けているのか疑問と不安を感じてしまうのである

が、財界の言うところの「国益」圧力によって、農業と農業外という対立構図を際立たせているようでは交渉も極めて難しいものとなるであろう。

さて、国は平成十二年に策定された「食料・農業・農村基本計画」を見直し(五年ごと)、平成十七年を目途に新たな基本計画の策定に向けて動き出した。自給率を四五%まで引き上げるとした目標が危うい現状で、この先どのような姿を目指し、どのような政策を展開しようとしているのか今後の議論を見守っていきたい。

この見直しに当たって、次の三点を課題として本格的な検討に取り組むとされている。

(一) 品目別の価格・経営安定政策から品目横断的な政策への移行

(二) 望ましい農業構造・土地利用を実現するための担い手・農地制度の改革

(三) 食料安全保障や多面的機能発揮のために不可欠な農地・水等の地域資源の保全のための政策の確立

しかし一方では、自給率の目標を見直す動きがあると言われ、政府の本音はどいなか気になるところである。

コストを基準とする国際分業と市場原理主義をもって貿易ルールを決めようとする中で、日本の農業はどのような形で存在できるのか。国際価格に対抗できない日本農業はその存在価値がないものとして考えるのか。一部の評論家や財界からこれに類した発言があったが、国民の多くは安心でざる食料という観点からも食料自給率四〇%という実態に不安を感じ、日本農業に期待していると思いたい。

ただし、米政策で見られるように国のスタンスは、市場原理を基本にして生産・流通・販売を生産者・農協などに委ねるといふ方式に転換してきている。国は一定の仕組みによる財源を用意するから、後はその中で地域としてどういう選択をしていくかはそれぞれの責任であり、その結果として中核となる担い手と持続可能な経営体が確立するこ

とを期待するということなのであろう。いずれにしても、今までと同じでは経営的に成り立たないという前提で検討されなければならない。その過程では、地域として、個々の生産者として大変な苦勞と痛みをとまなうであろうが、地域と農業の新たな形を作り出すステップであってほしいものである。

WTO・FTAの流れが加速する中、まさに「苦惱する農業」であるが、一方ではこの苦境をバネに「したたかな農業」への挑戦が始まっている。経営体として「あるべき姿」は多様であるが、北海道農業の将来にとって極めて重要な転換期であることは間違いない。

日本農業が自由貿易体制の中でこれ以上後退しないためには、国としての政策責任と農業者・農業団体の自助努力は当然のことではあるが、やはり国産農産物に対する消費者の信頼を高めていくことが大前提となるであろう。そのために、食の安全・安心に対する期待にしっかりと応えることと、農業生産と流通の実態そして農業の持つ多面的機能を理解してもらう様々な努力が大切なことである。そして食料自給率の問題は農業分野だけの問題ではなく、国民生活に関わる重要な問題であることを幅広く訴え続けていくことではないだろうか。

座談会

「地域農業の未来と 女性の役割」



出席者

長尾 道子

「食農わくわくねっとわーく」事務局長

及川かをり

蘭越町農業経営（野菜）

藤原 幸子

愛別町農業経営（酪農）

コーディネーター

太田原高昭

北海道地域農業研究所所長

太田原 今日「地域農業の未来と女性の役割」ということで皆様に話し合いをお願いします。私は旭川農村婦人大学とか、いろいろな女性のグループと大分長いことお付き合いしております。最近農業が全体として厳しいので、農協などで男の人の集まりですと真つ暗な会議ばかりやっているんですけど、女性の集まりだとすく元気なんです。これが非常に不思議なのです。今、個々の農村はやはり女性が支えているのだなあというのを、いろいろなところで感じております。



今日はその先頭に立っている三人の方にお集まりいただきました。皆さんが感じておられる「農村での女性の役割」ということについて、縦横に話っていたきたいと思っております。

まず最初は長尾さんからお願います。長尾さんはフリージャーナリストとして、全国の村を歩いていらっしやる方なので、内地の話が入っても良いですけども、一応北海道の各地の女性の活躍ということで、その中で長尾さんが感じている女性の役割のようなお話を最初にいただければと思っております。

長尾 私は長沼の農村生まれの芽室育ちということで、正真正銘田舎っ子、道産子なんですけれども、家は農業をやっていたわけではなくて公務員だったので、農村には暮らしてはいたのですが実は農業

のことを知らないということが、ホクレンに入ってからいろいろわかってきました。元々田舎の暮らしよりも都会の暮らしに憧れていました。生まれが昭和四十六年で、物心がついたのが五十年代なですよ。ですから、テレビもカラーテレビだったし、車もあったし、今の暮らしとさほど変わる生活ではなかったんです。

テレビの中で華やかな世界があって、東京から伯母が来道するたびに、私は「東京っていいな、札幌っていいな」とずっと思っていたんです。でもその時に、伯母がトウモロコシをすごく美味しそうに食べる姿とかはずっと覚えていました。また、私の中の原風景は、十一月頃になると、霜対策のタイヤを焼いている風景だったんですけども、そんな中で育つて私は札幌に生まれました。ホクレンに入って広報伝課というところで、北海道の農業を広く多くの人に理解してもらうという仕事をやっていました。でも私は、北海道に農業があるとは思っていただけども、北海道の農業が良いと思っただけではありませんでした。入会四年目で二四歳の時に、北海道農業をPRする雑誌を作れと、編集しなさいと突然言われて「エーッ」と思ったのですが、結局、取材も楽しく編集長として六年間やらせてもらいました。

普段当たり前前に行っていることが
とつてもすごいことだ

長尾 取材で農村へ行った時に、働いているすごく元気なおじさんたちもカッコ良かったんですけれども、どちらかというと、そこ

でてくる食べ物や、ちょっとしたおばあちゃんの話し振りだったり、老人の元気な姿とか、「おじいちゃんが溶接をしてこの小屋を建てた」とかという話を聞いたり、庭のきれいだったり、そういったものに私は



はすごく興味があったのです。こういった所はいいなあと思っていったところに、たまたまグリーンツーリズムとかスローフードといった言葉に出会ったのです。

それをひも解いたら、いろいろな人たちに出会ったのです。今年の春は九州に出たんですけれども、外から見れたことで、かえって北海道をよく理解できたと思ってい

ます。今は本当にこんなに北海道にいろいろな人がいて、こんなに可能性を持っている地域に私は生まれ育ったんだというちょっとした自信と、では私はこれから何をしようかという部分で自分自身と葛藤しています。ただ、自分の世代は先代がやってきたことと知らずに生活している人が明らかに多いのではないかと思います。普段当たり前にやっていることがとつてもすごいことだということを、私は何かを通して伝えていく仕事をしたい、紹介する本を作りたいと思っています。今はそのためのきっかけになることをいろいろしています。とにかく北海道の女性はすごいと思うのは、取材をしている中で一つの言葉に感動したりというのが、やはり女性のことが多かったんですよね。男の人が「本当に農業は辛いし大変だし・・・」と言って

いる中で、お母さんたちは「まあそれでも結構やっていけるもんよね」とか(笑)、「結構楽しいわよ」とか言っています。私から見ると決して楽しいわけではないんですね。でも「楽しく考えないとやってられないじゃない」とか、そういう生きていく逞しさみたいなものを持っていて、逆に私はそういうところに感動したというか、「この稲穂を見て、美しいでしょ」と言つのは男性ではなくて女性なんですよね。こういう人たちともっと関わっていききたい、そのためには先ず自分が動こうと思って、今自分からいろいろな所に足を運んでいます。

この間も襟裳に行っただんですけれども、お手製のお肉料理をご馳走になりました。牛を飼っているのは男性ですが、話の中で時々家庭料理の秘訣などを聞くと、やはり母さんはすごいなと思います。飯煮しが出てきて「これは近所の漁師さんからもらった」というように、近所との交流なども見えてきます。農村にはいろいろな物がまだいっぱいあるんだという部分をもっといろいろな人に伝えていきたい。そして、今の時代に苦しんでいる人とかが農村に来たら何か発見して帰れるかもと思いつながら、日々自分が一番楽しいと思っていることをやっている変な者です。長い自己紹介ですみません(笑)。

太田原 それでは、つぎは藤原さんをお願いします。藤原さんは指導農業者で町会議員という、女性パワーの最先端を走っているような方です。農村はいろいろな意味で変わってきていますので、女性の位置付けとか役割とか活動の場面みたいなものも随分変わってきていると思います。農業者として、その辺で感じのことや自分でおやりのことについてお話いただければと思っています。

藤原 大変なご紹介をいただきましたが、私は本当に普通のおっかさんでした(笑)。私は真面目に四人の子どもを育ててきた、本当に真面目なおっかさんです。外に出て歩くのが不真面目というのではないんですけれども、酪農というのは朝が早くて夜も遅い、夜星朝星というのが本当に実感できる労働時間でした。昭和四十七年に結婚したんですけれども、ちょうど減反政策も始まって町へ町へと出て行く人が多かった中に、私はその波に逆らうようにして夫が



住んでいる静かな谷あいのほうに行ったのです。その時にみんなから、「さっちゃんば農家というものを知らないから、農家に嫁に来たんだよね」と言われました。

私の父親は土建業を営んでいたのですが、私はその手伝いをしていたので、私はその手伝いをしてきたのです。ですから経理関係とか入札関係とか保険の仕事とか、そういうのを一手にやっていました。土建業界もその頃は男の社会で、入札といつてもほとんど男の人がやっていた世界です。父の秘書兼雑役係として手伝っていたものだから、いろいろな所に顔を出したりはしていたんです。気の荒い人たちが多いので、ちょっと間違えたらすぐに怒られる。本当に疲れてしまって、「農業青年と一緒にいたら癒されるかもしれない」と思って、目が田舎のほうに向いたんです。

夫と私は知り合って一週間で結婚を決めました。夫は前々から私を

見ていたのですが、私は農家を知らないし、父親も母親も、すごく心配しました。周囲の反対を説得してお嫁に出してもらったのです。最後は「仕事はできないかもしれないけれども、体だけは丈夫に育てたから」って送り出してくれたのです。

私に夢を語ってくれた夫

藤原 親を説得している間に、夫は私たちの住む家を建ててくれたんです。営林署の官舎を払い下げてもらったので、毎朝乳搾りが終わった後に、四〇km ぐらい離れた旭川まで友だちと一緒に壊しに行つて、壊した材料を持って来て家を建ててくれたんです。屋根だけトタン屋さんに頼んで、後は壁もお風呂も全部自分でつくってくれました。

私は家を建ててくれたことも感激だったけれども、何よりも夫が自分はどうしたいんだという夢を私に語ってくれたというのが、私にとつてはすごく新鮮な感動に近いものがあつたのです。私は農家の人と一緒にいるという不安は全然なくて、社長夫人になるという(笑)気持ちでした。だつて農家を経営している企業家だと思つたものですから。それで実際に結婚したら、「うちは今年から青色申告をするから、よろしく頼む」ということで、帳簿一式を全部渡されたのです。その中には借金もありましたよ。新婚旅行も借金、指輪も借金(笑)、そういう経営だったけれども、夫はマイナスの経営の時から「計数管理に力を入れたい」と言い、その分野を私に担当してくれということ

した。私も子どもを育てながらできることといえば、そういう計数管理がいかなく思っていました。

では牛舎に一切行かなかったのかといったらそうではなくて、嫁に行った次の日から三〇頭分ぐらいのサイレージ出しをしたのですが、サイロに入ってスコップで出すのはものすごく疲れるんです。シバしているから、それをツルハシで崩しながらやるんです。それと乳搾りもずっとやってきて、長女が四歳になる前に四人目の子どもを産んだのです。カッコ良く言えば、子どもはうちらの子どもじゃないので、兄弟でありながら友だち同士のように育てていくように、というのが夫の言い分ですけど、自然に神様にお任せしていたというのが私の本音です。

その子どもたちもチャンと育てくれました。今の場所は子育てや牛を飼うには良い環境だけれども、交通が不便でバスから降りて四km以上の山道をこなくてはならないのです。街灯が一本もないのでライトを点けて自転車で走るので、夏の夜などはそこに虫が寄ってきて顔中虫だらけなんです。友だちは家の前でバスを降りるのですが、お姉ちゃんは文句一つ言わないで、朝も先頭になって妹や弟が後ろに付いて冬は当然ですが歩いて通ったのです。だから「自分で掃除や洗濯ができるようになったら旭川へ出てもいいか」と言われた時には、「うん、いいよ」と言ったのです。地元にも高校はあるんですけども、旭川の高校を受けてみんな旭川に出てしまっただけです。

私は、一人行っても三人残っているからまあいいわ」、二人行っても「まだ二人いるからいいわ」(笑)、三人行っても「まだ待望の男

の子がいるからいいわ」と思っていたのですが、その子が行くことになった時は一人でサイロに入って泣いたことがあります。サイロの中で泣くというのは、誰にも見られない場所だということと誰にも聞こえないということ、私もそこで思い切り泣きました。自分は何も悪いことをしていないし今まで本当に肩寄せあって暮らしてきたのに、「どうして離れ離れにならなければいけないんだ」と泣けてきたのです。その泣き声は誰も聞いていなくてもサイロがちゃんとしていて、それを跳ね返してくるんです。その跳ね返った自分の声を聞いたら、他所の町で冷たい水で洗濯しながら頑張っている子どもたちのことが思い浮かび、「いつまでもメソメソしないで母さんも頑張らなきゃあ」と思って、すぐに気分は変えられたんですよ。

こんなに山奥だけど私だって 頑張っているのに

藤原 末っ子が中学生の時に「お母さん、今まで自分たちのことを一生懸命みてくれたから、今度はお母さんが好きなことをしたいよ」と言ってくれたんです。その好きなことが選挙だったのかと言ったらそうではないんですけどもね(笑)。結婚して二〇年目ぐらいの時に、本当に自分は頑張っているのに誰も私を認めてくれない」と思っていたのです。結局、牛舎と自分の家とたまにAコープに行くぐらいの行動範囲しか、私はなかったんですよ。こんなに山奥だけ私だって頑張っているのにという思いがあって、何かで自分を表

現したかったですよね。そういう思いを生活改良普及員の方が感じ
てくれて、北海道主催でやっている「農村に生きる女性をテーマにし
た作文コンクールに応募してみないか」と言ってくれたのです。なか
なかまとまらなくて、締め切り当日にファックスで送った原稿が知事
賞になったのです。作文コンクールの発表の時もその生改（生活改良
普及員）さんが何度も家に電話をくれるけれども、私は乳搾りで全然
出られない。そうしたら八時過ぎまで何回も電話を掛け直してくれ
たんです。ばあちゃんには「またあとで、またあとで」と用件を言わ
ないで、ようやく私につながった時にその生改（生活改良普及員）さん
は「おめでどう」と言ってくれたんです。知事賞だということをお
たかったんだけれども、私に直接言ってくれて、私が喜ぶ反応を自分も味
わいたかったということでした。そのことがそもそも私の社会進出の第
一歩だったのかなと思います。

何年か前になりますが、愛別町にポर्टピアの誘致運動があったの
です。「ポर्टピア」「場外舟券売り場」というもの自体を私たちはよ
く知らなかったのです。「そういうものは自分たちの町にはいらない、
似つかわしくない」という思いがあって、お母さんたちと一緒にお父
さんも巻き込んで、「じいちゃんもか勉強しましょう」ということで
調べたんです。そして、そのことを自分たちだけのものにしておくの
はもったいないからということと、新聞に折り込みを入れて町内に
配ったのです。そうした中で、皆さんと情報を共有することの大切さ
を知りました。「自分たちはいらないと思ってる」という陳情書を出
して、議会の傍聴にも行きました。結局、議会で採択されて、愛別
には場外舟券売り場は誘致されなかったのです。

町づくりはお母さんの発想で

藤原 町づくりというのはこういう風にはやればいいんだ
なと、お茶飲み話にそういう話題が出てくるのが良かったのかなと思っ
ています。本当にお母さんの発想というか、何もわからないお母さんの
ままでいいから、いろいろなことをやってみよう、というのが議員に
なったきっかけかなと思います。単純にいえは「人口の半分以上は女性
だし有権者の半分は女なのに、女性の議員が全然いないのも不自然だ
よね」という発想から、私も議会に出て活動したいと思ったのです。

最初は落選して二回目によっと当選させてもらったので、選挙は四
回やっていますが、議員は三期目です。そのたびに票が伸びているん
です。今回は、経済・環境の常任委員長になりました。経済といっ
たら農業とか教育関係が入り結構大変ですが、他の仲間にも助けられ
て頑張っていると思っています。

太田原 まだまだ話がたくさんありますけれども（笑）、こ
の辺で及川さんにバトンタッチしてください。及川さんは新規就農と
いうことで、「地域と農業」では大変澁刺としたエッセイを書いてい
ただいており、私も毎号楽しみにしているのです。新規就農という立
場でご覧になった農村・農業、女性の役割というふうなことに
ついて、そもそも始めの頃から感じておられることをお話いただければ
と思います。

及川 平成十年までは普通のサラリーマン一家だったんです。夫が突然、「引越したい」と。転勤とかではなくて「引越したい」と言うので、そろそろアパート住まいも区切りをつけるのかなと思ったら、「蘭越町という所に引越したい」と言うので、みんなで単身赴任かなと思っただの（笑）。何となく予感はしていたのですが、まさかと思ったら「会社、もう辞めたんだ」と言うのです。潰れたかなと思っただけでも、会社は潰れていませんでした。夫の希望で、二年かかって田満退社できるように仕事を片付けたんだそうです。

その二年前、平成七年に関わった蘭越町の「村おこし、町おこし」のコンサルタントの仕事で、蘭越町の産業課の方と農業委員会の方と話をしていて、「コンサルさんはそれこそ口で畑を耕すのが商売だからね」と言われたんだそうです。町の青年部で「みのり会」という会があるんです。青年部ですけども五〇代です（笑）。その方々と話した時に、「俺らは七〇歳まで青年だ」とおっしゃっていて、ついつい売り言葉に買い言葉で「じゃ、俺もやる。入れてください」と言ったそうなんです。その約束の二年間で仕事を片付けて、引越すぞとこのでついて行ったのが蘭越町だったのです。

どうやってたら

職業欄に「農業」と書けるのか

及川 平成七年ですから、その時にちょうど新規就農支援とい

うのが始まったのです。その支援がなかったら、きつと今はないと思っただけでも、道の担い手センターを通じて就農ということになったのです。私は、誰でも農家になれないらしいというのはわかっていますけれども、どうやったら職業欄に「農業」と書けるのかということもわからなかったのです。



平成十年から十三年に農業委員会の方に認定されるまでは、職業欄には「農業見習い」というふうに書いていたのですが、地域の皆さんに応援していただいて、今では職業欄にちゃんと「農業」と書けるようになったのです。ただ、今でも農業という職業がどういう正体を持っているものなのかはまだわかっていないのかもしれないと思っています。

蘭越町というのは見たことも聞いたこともない所だったんですけども、夫がいきなり「お前を子ども頃に引越させてやる」と（笑）。若返れるのかなと思っただけでも、ただ回りに小川があって田んぼにおたまじゃくしがいて砂利道で、そういう感じの所だったんです。農村というのはものすごく閉鎖的な所だといふふうに思っています。私たちがいたいなよそ者が生活できるんだろうかとても心配だったんです。夫が農家の長男坊で、いずれ自分の実家を継ぐために帰るといふパターンとは違って親戚もいませんし、知り合いも役場の仕事で知り合った非農家の方とみのり会の農家の方という感じでした。夫

は顔見知りだからいいですよ。私はこのままついて行って、そこで生活できるのかなーと一瞬思ったんですけども、まあ何とかなるだろう。

そして行ったところ、父さんも母さんもいっぱいいて暖かく迎えてくれたんです。引越しをしている間中、みんな入れ替わり立ち代わり来てくれて「晩に食べなさい」と言っていて、鍋ごと煮物を持って来てくれたりしたんです（笑）。名前を覚えるより先に「及川さん、及川さん」とみんなが声をかけてくれて、気が付いたらもう五年経っていたという感じで、すごく自然に居着いちゃったのです。

「女が前に出るといのはどうもねー」

及川 今よく「女の人は元気、農村の女性は元気」と言いますが、いまでも、いま急に元気になったわけではきつくないと思うんです。外から入った人間として見ると、家庭の中か地域の中ぐらいいい女性というのはエリアを持っていないんですよ。外に出るためには段取りをしてからじゃないと出られない。その段取りがなかなか厳しくて、「きちっと段取りをしないと出してもらえない」と女の人は思っているんです。結構気が強いので、「やることをやらなければ出たくない」というのもあって、出る機会を失っているのではなにかと感じています。ただ、それを一歩突き破って外の世界にはなばたつと羽ばたいて行った人は、「ものすごく力を発揮しているな」と感心しているんですよ。

けれども、農村の女性は「家の中で慎ましく」というのが私たち外から来た人間のイメージなんです。農家の人はのんびりしていてもかゝ人が良くて」とかというイメージがどうしてもじゃまになっているのかなと思います。外に出る人は慎ましくないのか、夫をないがしろにしているのかといったら、そんなことは決まっていますけれども、「女が前に出るといのはどうもね」というイメージがじゃまをしているんですよ。女の人はもっと活躍できるのに、と思うんですけれども。

太田原 藤原さん、農村・農家での女性の立場やいわゆる社会進出についてどう感じていますか。大分変わってきたと思いませんか。

藤原 私は社長と結婚したつもりだったから、まず農家での立場については全然違和感がなかったです。でもそれがどんなに恵まれていたかということが、婦人部だとかに入って他のお母さんたちとお付き合いするようになってわかってきました。農家の女性にはお小遣いもあたっていなかったり、五〇歳になろうとしているのに自分の自由になるお金もなくて、子どもに必要なお金などもいちいち使道を言っていて貰っているという人がまだ多かったです。私は最初から給料制でしたので、そういうことに全然気付かなかったのです。そういうことが当時かか恵まれていたか、親にそのことを言ったら、「貯金も何も財産が無いから任せただよ」と言われました。無い無いと言ったってあるじゃないですか、借金が。

我が家の情報公開

藤原 お嫁に来て、「貰ったお金は自分が自由に使ってもいいものだと思っていた。だけど自分の家にこんな借金があるかわかっていれば私だって我慢できた。お小遣いをそんなに貰わなくてもよかった」と、借金があるということをやっと後で聞いた人もいます。今で言う、我が家の情報公開を最初からきちっとしてくれた、だから私はうちの舅と姑に感謝ですね。

何年か前から、帳簿つけは農家の母さんたちがほとんど担ってきていて、来年からは白色、標準もなくなってしまうので、これから本当にお母さんたちの出番がくるのかなと思います。今はただ生産するだけではなくて、それに付加価値をつけて企業化するお母さんたちが増えています。私も平成十年に自分たちのグループで、アイスクリームの生産販売を立ち上げたんです。愛別町では初めてだったので、それに続けとばかりに他のお母さんたちも立ち上がりました。農家の経営はお父さんが主体であったかもしれないけれども、企業化で始めた加工部門は自分たちが主体で、加工から販売、そして帳簿・申告、全部自分たちがやるわけです。だからお金をいじったりするのも全然苦になつていないし、婦人部等の総会の資料作りも自分たちでできるようになりました。やはり女性というのは何でもやればできるし、お母さんたちが家で黙っているよりは、外に出て明るくニコニコ元気なほうがお父さんたちも幸せを感じているのかなと思います。また、そ

れが町の活性化につながるのです。

母ちゃんのすごさの秘密

太田原 長尾さんは、あちこち歩いてさういうお母さんたちをたくさん見ていませんか。関心されたことや元氣のモトなどについて、少し思いつくことをお話ししてください。

長尾 基本的に朝・昼・晩、ご飯を作って仕事をしている。という、そのこと自体が私はすごいと思うんですよね。また、農村に行けば二世帯三世帯で暮らしていますが、まずそこがすごい。

友だちや妹が結婚してよく言っていたのが、「主婦業とはこんなに毎日毎日ご飯を作って生きているんだ」と（笑）。それをしながら働いている農家の主婦と言うのは本当にすごいなと思うのです。それをお父さんたちが手伝っているという雰囲気は、見ている限りあまりないんですよね。でもおばあちゃんが子育てを結構支えていたりする姿とかもすごいなあと思ったりします。私は、核家族で育っているから想像ができないというのもあるんですけれども。

もう一つは、なのにも何でも手作りをしているところ、作物を作っている、加工品も作っている、漬物も何種類も漬けている、夏場は浅漬けを作って、秋になったららっきょう漬けて、味噌を作る。ウメも漬けて、聞いたら山菜も取りに行っているし、とにかく本当に働

及川　でもそれは秘密があるんです。大きな声では言えないんですけれども、引越してすぐに思ったの。夏場にキリギリスのように遊んでいると、冬食べる物がないんです(笑)。だから夏の間はせつせと塩漬したりいろいろな加工品を作ったりして、普通に冬場の食べ物として加工しているんだと思いました。最初の冬は頂き物で「すみません、すみません。美味しい、美味しい」と言いながら過ごしました(笑)。札幌だと吹雪で買い物に行かれないといっても、我慢すれば何とかなるでしょう。本当に道路が塞がっちゃったり、コンビニができたのもここ二〜三年の話だし、五時になったら農協のスーパー、Aコープも閉まっちゃうし、人も歩いていません。大型店は車で三〇〜四〇分ぐらい走らないとないんです。他に商店はあるんですけども、知っている人は「何とかちゃん、開けてよ」と言ってお入れなのですが、私たちはそついうお付き合いがないからじっとしてないなければいけなくて。

農村は段取りがすごいぞ

長尾　その段取りのすごさだと思っただけです。話は全然違いますけれども、「豊か」というのはもしかしたら、しっかりとした段取り、なのかなあとあって、私もずつと感動しつばなしたたんです。何でかなと思っただけにあって、私もお母さんがソバを打ってくれて、そこにポコンと豆腐がのってました。これ何

ですか」と聞いたたら、ちょうど年末だったので「年末は外に出られないかもしれないから、豆腐を作っておく」と。その豆腐がいろいろな姿になって食卓に出てくるんです。なるほどと思いました。大豆を豆腐にされていて、納屋の奥のほうに豆腐置き場がきちんとあって、そういう食べることの段取りからいろいろなものが見えてくるのか・・・。

親元で就農する友だちですけれども、親元では今まで二人家族だったのが若夫婦が戻ってきて全部で四人になるからといって、最初にお母さんは自家用野菜を作るハウスの大きいのを建てたというのです。そこが豊かな部分なのかなあとあって、私はすごく感動したんです。

よく北海道の農業を語る時に、北海道の専業農業があたこうだ、これからの農業は先行き暗くてどうしようもなくてという話ばかりするけれども、農村で一年間暮らしていくだけの自家野菜を作られている人たちに、日本の食料自給率が四〇%だからどうこうと言っても何の通用もしないだろうなと思います。逆にそういう人たちと関わって、自分たちが少しでも豊かな生活をするための術とか、そういう段取りを覚えていきたいなとずーっと思っていました。

太田原　いや、とても面白い話ですね。よく「男の会議は真っ暗で、女性は明るくて元気だぞ」と言つと、男の人たちは口惜しがって「いや、女は何も知らないから元気なんだ」と言っただけです。何も知らないというのは、つまり今の農業情勢だとWTOとか、そういうことを言っているわけですから、今の話を聞いたら逆に男は何も知らないから非常に不安を持っているとも言えますね。女性はそ



ういふふうには確実に足元から固めてきているから、割りに楽観的に前を見られるのかなと、そう思いました。

長尾 「食べるという行為から考えよう」という時に、その家のご主人は「どうやって食べ物を作ったり加工しているか」ということを、本当に知っているのだろうかと思います。お母さんたちは農業者でありながら実際に料理をしているんです。足元にすごいものがあるじゃない、といつも自分は思っています。実はそのお母さんたちも決して自分一人で野菜を作っているのではなくて、お隣さんからいただいたりお隣さんにあげたり、町の人が来て交流もしてという、小さいながらもしっかりとした交流があったりとかするんです。だから村というのは一人では生きていられないというのわかってくるんです。私もいろいろな村で生活してみても「うん、なるほど」と気づかれました。だからわずらわしい付き合いかもしれないけれども、それは生きていくためには必要なものです。今になって私は村のわずらわしさが素晴らしさに見えるようになりました。

太田原 そうですね、暮らしの力みたくないものの素晴らしさですね。都会の生活ではそのような段取りはないんでしょうか。

長尾 都会に限らず、農村に住んでいるけれども、私みたいに農業者でない人はそういう力はないわけですね。農村といっても、たとえば蘭越町全員が農家かということではないし、では蘭越の町の人はそのだけの段取りをして生活しているかというと、お母さんた

ちは確かにご飯は作るけれども、地元の物を使ったりとか食べ物を大切にしたりというのは、している人もいればしていない人もいる。

すき焼き、刺身はご馳走じゃない

及川 たった五年間だけれども、住んでいて「あ、この頃変わったな」と思うことがあるんです。私のご近所では、お盆とかお正月とかには、本家さんにいっぱい親戚が戻って来るんです。そんなに買い物に便利な所ではないのに、一〇〜二〇人の食事をバツとお母さんが準備するでしょう。やはり町から遊びに来るんだから恥ずかしくないものを出そうと。それは何かといったら町で買ったものなんです(笑)。

やはりそれはご馳走じゃない。じいちゃんたちは自分が小さい頃から食べなれた物が食べたいんです。それが懐かしい味で、買った物にはないものなんです。若い人たちはそれが小さい頃は嫌だったんだけれども、でもそれがないと淋しいと感じるようになってきているんです。だから価値観が少しずつ変わってきて、今は堂々と「ここでしか食べられない物だから、贅沢に腹一杯食べていきなさい」と言って、それこそ大根から何から大きな鍋に入れて蒸かしたりして、肩の力を抜いた飾り気のない物でもてなすようになったんです。決してすき焼きや刺身がご馳走じゃないということに全員気が付いたんです(笑)。

長尾 やっぱりここの暮らしが良いんだっていうのは、結構外の人から言われたりとか、出て行った自分の息子たちが戻って来てそ

ういう物が食べたいとか、そういう外の風があったら自然とそうなったのでしょうか。

及川 とうか、普通は言はずらいでしょ。ご馳走になりにきて、「ここですき焼きはないでしょう」とは普通の人は言わないと思うんですよ。私の夫はコンサルタントだったから、コンサルタント的な立場から素直な感想を言ったところ(笑)、「なるほどなあ」とわかってくれる人がいたんです。

太田原 外から入って来る人の役割というのは、何かを発見させるとうか、多分そういうことなんです。だから地域にとっては及川さんのご家族はすごく良い方だったんですね。

長尾 私も最近自分に課してやっているんですが、外の人間というのは何か変えられると思って入って来る人も結構いるんですけど、地域の人がやっていることがすごいというのを引き出すとうか、伝えていくことが多分外の人間の役割かなと思うんです。外の人間はお世話になるんだから、何かで返していくにはお金であったり労働力であったりするわけですが、そういった中で農村の場で都会の人との交流ができればいいと思います。

及川 でも農業というのは職業じゃないですか。ある意味経営的に成り立たないと、それが遊びになってしまいかもしれないんですよ。職業として農業を選ぶといった時は、多分お金では買えないも

のが何かあるだろう」と、それが何かわからないんだけども、そういう魅力があったんです。でも実際に生活していくにはお金がかかるじゃないですか。やはりないと困るので、お金儲けになるかどうかという判断も大切です。でもお金儲けだけで選ぶと、農業は必ずしも魅力的な職業ではないですよ。でも何で選んじやったのかな、何で辞めないのかなとも思うんだけど（笑）、女の人は元気で、男の人でも元気で、力を合わせて「さあ、やりましょう」と言っているわけではないんだけど、間近で男の人が汗を流したり母さんが大変そうに働いているのを、お互いに見える範囲で働いているというのものはものすごい安心感があるんです。サラリーマンをやっている時は、給料袋にあまり感動しなかったんです（笑）。でも今は大変な思いをして、たとえば力ボチャがいくらという通帳を見たらゼロが一つ足りなくて、ものすごく大事に思えるんです。

長尾 感動産業ですね。

農業経営は男女共同参画の現場です

太田原 段取りから感動産業へと話は広がっていますが、今までの話を聞いていて普通のおっかさとして藤原さんはどうですか（笑）。

藤原 段取りって言ったけれども、経営参画のあり方も影響すると思います。確かに私も先ず子育てをして、帳簿付けをして、

朝晩牛舎に行って、といったら睡眠時間は五〜六時間ですよ。そして本当に三度三度の食事を作って、自分はそれが当たり前としてやってきて、それを良しとしてやってきました。男女共同参画でいけば、農業経営ほど男女共同参画の現場はないと私は思っています。だけどそれが平等参画かと言ったら、そうではないような気がするんですよ。

去年の暮れにスイスに行かせてもらったんですけども、あそこは本当に女性と男性の仕事が分かれています。男の実習生と旦那さんは牛舎の仕事とかエサ作りで、その奥さんは家の中のことと庭仕事です。そして女性の実習生も入れて、一緒に家の中のことと庭仕事と社会活動をしています。その代わり、家の中のことはきっちり手作りして保存食も作って、食事も心が和むような食事にする。贅沢な物があるわけではないけれども、ミルクとチーズとパンとジャムと、本当に保存食ばかりなんですけれども、それでも心の安らぐセッティングの仕方をする。そういうふうにならなくていいんですよ。

日本は全部をしなければならぬから、お母さんたちは大変だと思っただけです。お母さんたちが加工部門のほうでやっていますが、それは自分の仕事の空いた余暇の部分でやっているから、本当にそれで生計を立てていける売上になるぐらい広げてもいいものか、自分の余暇の時間だけである趣味の範囲内に留めておくべきか、簡単に言えば売上が三百万円以上になるか三百万円以下で止めてしまおうか、そこで大きく分かれるんです。そこに男の人がちょっと手助けをしてくれたら、多分売上が伸びて企業化できるお母さんたちもあると思うんですよ。

ね。女の人の方がもうちょっと出たいなあという時に、そこがどうしても平等になっていないような気がするんです。男の人が何かをやるうとした時はそれに全力投球だけれども、女の人が何かをやるうとした時は、家のことを投げ打ってということにはならない。私は議会議員をやらせてもらっていて、誰も「さっちゃん、偉いよねえ」と褒めてはくれませんよね。それより「旦那さん、偉いよねえ」と（笑）。

そして他所に言ったら「私は・・・」としゃべるものだから、「旦那さん、どんな人？」とか「どんな顔してるの？」とかよく言われます。私は「無精ひげで、チャールズ・ブロンソンみたいな顔をしている良い男ですよ」と言ってます。本当に私が一目惚れしたぐらいです。それから良い男だと思っただけでも、私がこつこつ出て歩いてくのはやはり家族のお陰というのがあるんです。家族が円満でなくて、子どももアッチャ向いてるし、お父さんもアッチャ向いてる、ばあちゃんともこうだわ、というのが



は、他所に言ってなんぼ私がいいるな話にしても説得力に欠けちゃうわけです。だから、家族との関係、特に夫との関係は一番気にしてなお一層努力しました。もう一つは、自分の家の経営です。外に出歩いてばかりで家の仕事をさっぱりしなくて思われて、

経営が左前になったら、それも説得力に欠けると思っただけですよ。だからなお一層我が家の経営には力を入れて、借金をゼロにしたん

です。自分の子どもでもいいし、新規就農で入って来た他人様でもいいけれども、そういう人たちに後を継いでもらう時に、借金も一緒に引き継いでもらうのは可哀相だねということで、私たちは一応借金はゼロにしたんです。

うちの近所でも新規就農に入った方がおります。その旦那さんは、冬はアルバイトをして生活費の助けにしていたのですが、そのアルバイトがなくなって、今年は旦那さんの替わりに奥さんが仕事に出るようになったんです。その家は、冬は旦那さんが主夫をして奥さんが外に働きに行っているんです。このご夫婦は、たまに外の仕事と家の仕事を交代することがあったんです。旦那さんが雪下ろしなんかをして「えらい、えらい」と言って帰ってくると、奥さんもどんなに大変なのか自分も体験すると言って、雪下ろしに行くんですよ（笑）。その間に旦那さんが主夫だから茶わんを洗ったり、子どもを保育所に送り迎えしたりして、反対の立場に立ってみるということをやっているんです。私はそういう若い人たちが結構お付き合いがあるんですが、すごく「良い風」を私たちにくれるのです。他所から来た人たちのおかげで、私は愛別で生まれて愛別で育ってちょっと場所が変わったぐらいの生活しかしていないんだけど、本当に「良い風」を受けながら生活できているなあと思います。

先ほど食べ物段取りの話が出たけれども、そういう準備が受け入れる農家自体にできているんですよ。私は嫁に来て三三年になるんですが、姑がデンプンを作ってくれたんです。家にはかつて皮からくず芋から捨てる「ミミ」がないぐらい全部炊いてやっていた、生「ミミ」サイクラールと呼んだ大型犬がいたんですけれども死んじゃったので、くず芋が余っ

たんですよ。ばあちゃんはもったいないから何かできないかと言っ
 んです。くず芋を一生懸命おろして、バケツ二つにそれをさらしておく
 んです。そして何日か経って「これだったんだよ」と見せてくれたの
 が、真っ白な雪の花のようなデンプンだったんです。私はそれを見た
 時に、今まで三〇年以上も一緒に暮らしてきて、味噌やこうじは知っ
 ていたけれども、おろし金とバケツと水というあり合わせの道具でデ
 ンプンを作ってくれたというのがすごい感激で、喜んでそれを唐揚と
 かお餅の粉に使ったりしていたら、またそれを作ってくれたんです。

それも引き継ぎたい食文化だし、こうやってしゃべることも大事な
 文化、食べることも文化、そして作ることも文化だと思ったら、うち
 のばあちゃんは八三歳だけでも叱咤激励して(笑)、まだまだいろ
 いろなことを教わりたいなあと思っています。

「美味しさ」ってなに

及川 長尾さん、今の話とかを聞いていて、どう思いますか。私
 も思うんですけど、農家のお母さんたちが作った物を食べてみたいと
 思うでしょう。

長尾 めちゃめちゃ思います。変な話ですけども、「まちぢ
 くり」とか「加工品開発」の会議とかでは、こういつつとこう話され
 るものは欲しくはないなというも思っていますよ(笑)。聞
 いた後にいつも隣のお母さんとかに、「お家でどんなのを食べている

んですか?」とか「今日の夕飯は何だったんですか?」とかって聞く
 と、「フキの味噌を作ったのよね」と言われて、そっちが食べたいと
 思うんです。何でもすぐ商品化して製品で売ろうとするけれども、私
 は作った話を聞いて、一緒に作りながら食べたいですよ。

及川 わたしもそう思うんです。でもコンサルさんと話をして
 いると、すぐにテーマパークをつくらうとするんです。でも農家のお
 母さんたちというのは、たとえば機械で刈った後に落とした大豆を集
 めて何か作ったりとか、商品にできなかった大根を使って何か作っ
 たりとか、回りの手の届く所にある物で美味しい物をパッと作るでし
 ょう。農家のお母さんが「あ、閃いた」というようなことですよね。そ
 ういうのじゃなかったら意味のないに思うんだけれども、シヤムに
 するためにわざわざイチゴを作ったりという話になってしまうのは
 残念です。

藤原 私はよく「お前、ケチだ」と言われるけれども、本当に
 もったいないという気持ちがあるに働いちゃうんです(笑)。だか
 ら梨でもボタツと落ちたやつの方が美味しいですね。すぐに食
 べるなら絶対に完熟が美味しい。自分たちで手間ひまかけて作ったも
 のは、本当に葉っぱ一枚でもイタマシイというか、もったいない。だ
 から最後まできれいに食べようという気持ちですが、冬も腐らないうちに
 加工してということになるのかなと思います。

太田原 多分そういうものが、食べて美味しいんでしょうね。気

持ちが味に染込むというか、単に化学的・物理的な要素ばかりではない生活の文化としての食べ物の味わいというものでしょうか。

長尾 ホクレンにいた時に、美味しいというのをよく味覚分析するんですね。お米も良食味米とタンパク何とかというのをやっている、それはそれで一つ大切なことかもしれないけれども、作っている人がなんとなく想像できてその人と一緒に食べるとか、そういう物を家族と食べるとか友だちと食べるとか、その方が美味しいという自分なりの概念があるんです。自分が知っている人から買う時に「農業、何回撒いたの？」とか「どんな肥料を使ったの、どんな土の耕し方をしたの？」という話はしないじゃないですか。たとえばおばあちゃんが「今年は虫がいっぱい出て大変だった」という話をした時に「そうか、それじゃあ大変だよなあ」とか、一緒に草を取りながらおばあちゃんから「今年は草が多かった」と言われると「やっぱり」とか思う気持ちが大切じゃないですか。だからよくトレーサビリティの話とかもするんですけども、ここに履歴がきちんと書いてあるから安心とかじゃなくて、そういうことも必要ですが、安心というのはもっと人と人とのつながりだったりしませんか。

やはり作ってない人間として、作ってもちろんでいる人の所に足を運ぶというのが、自分がやらなければいけないことだと思っているし、逆に行つてすごいと思ったことは「すごい」と言い続けていきたい。農業はそんなに簡単なもんじゃないけれど、農業は今まで重い部分ばかり出し過ぎていたのかなと思ったりもするんですよ。当たり前前々やっていることなんです。それをなんでもっていいかないのかなと

思ったりもするんですよ。

藤原 でも言うほどのことでもないですよ。

長尾 でも言うほどのことだと思っんですよ（笑）。

太田原 だからそれをするのが長尾さんなんですよ。地域の方が自分はずいいでしょうとは言えないことを橋渡しすることが長尾さんの役目なんですよ

知らなかったら聞いちゃおう

及川 私たちは新規就農者で、自分たちの目にするもの聞くもの初めてでしょう。ついつい知らなかったりわからなかったりして聞いちゃうんですよ。そうすると農協の人たちが「また、及川さんかい」と言っただけでも（笑）、近所のおじさんに聞いても「さあ」といって感じで、実はおじさんたちの知らないこともいっぱいあるんです。お米の補助の関係で言うと補助金の名前というのは毎年変わるんです。其保証とか緊急何とか対策事業とか、いろいろな名前を通帳に入るのでしょ。これって何に対する何の保障なんだろってこと、誰に聞けばいいのかもわからないですね。とにかく農協の通帳に入ったのだから、農協の人に聞いてみたら「さあ」と言われて……。

でも農家の人たちは割と無頓着というか、わからないんだけど

聞かないんですよね。そして自分のことも言わないんです。ただものすごく自分の仕事には自信と責任感があって、選別にはものすごく神経を使って緊張してやっているから品物を見ていただければわかる



と言っんです。確かに立派な物だけれども、それが市場にあって市場から仲買さんによって、そしてスーパーにいつて、スーパーに置かれた時には、「あのおっさんが作ったんだから、美味しいよ」と言ってくれる八百屋の元気なおじさんがいなければ、黙ってそこに陳列されているだけでしょう。それを見て「どうやって美味しいと思えるのよ」と思っんです。作る人も一生懸命だし、買う人も美味しい物を一生懸命選んでいるんだけれども、上手く伝わっていないということなんじゃないかな。

長尾 いろいろな人と知り合いになると、どうしてもその産地の物に目がいくじゃないですか。愛別キノコがあると、作っていないと思っんですけれども藤原さんの顔が浮かんできて、愛別、そういうば藤原さん元気かなという感じにはなると思っんですよ。

及川 その時に、お父さんたちは良い物を作ろうとって、職人気質というか品物しか見ていないんです。でも、母さんたちは「この葉っぱはこういふふうにお虫食いになっただけなんだけれども、食べ

てもらえばわかるのにな」と思っでしょう。そういうのって買っくれる人ともものすごく近い立場の感覚なんです。でもお父ちゃんたちは「これは許せないからはじけ」と。母さんたちは泣き泣き「イタましい、イタましい」と思っでしょう。父さんたちがロットの大きな商売として農業を考えているとしたら、母さんたちは畑で獲れた物を一円でも一〇円でも、とにかく一つも「ミ」にしないで食べてもらいたいと思っっているんです。

地元の人は地元の物が欲しいんです

藤原 及川さんは直売とかやっていますか。

及川 直売もしていますし、トラックで直接売りに行ったりもするんです。でも、周りの大きい農家さんからすれば「そんなのは子ども騙しの農業だ」とおっしゃる、その気持ちもわかるんです。

太田原 蘭越のあの直売場は、農協でつくってくれたんですよ。それは新規も既存も関係なくみんなで作っているわけですね。

及川 「もぎたて市」と言いますが、まさかAコープがホクレンから仕入れたものではなくて、「お母さんたちの直売やっていいですよ。店舗を貸しますよ」と言っってくれるとは思わなかったの、「今の、空耳かな」と（笑）。だって青果売り場があるんですから、営業

妨害でしょう。

藤原 タダで貸してくれてるんですか。

及川 そのです。手数料を一五%は取られるんですけども、
本当の手数料だけです。Aコープ店の棚に並べて置いてくれて、会計
もしてくれてということですよ。

長尾 あれ、売れてますよね。やはり地元の人には地元の物が欲しい
んですよ。だけどなかったというか、私二セコに行った時に必ず直
売所とAコープはだいたい見に行くんですけども、直売所のほうに手
が伸びるというのは、やはりその地元の物が買えるからですよ。

及川 そうなんです。お母さんたちは、その人に食べても
らって笑った顔が見たいというような、手狭なんですけれども（笑）、
そういう感覚がお父ちゃんたちになかなか通じないんですよ。男の
人の夢というのはどの辺にあるかわからないですけども、その辺で
売ることではないことは確かですね。

太田原 そのですね。男の夢はやはり東京で商売するんですよ
（笑）。しかし、世の中の流れとしては、私も長尾さんと一緒に「ス
ロフード運動」なんていうのをやっていますけれども、そういうこと
が大事だということにだんだんなってきたですよ。今の話はま
さに「地産地消」でこれを進めようというので、今北海道では知事

以下そういうことをやろうとしていますから、そういう時代が来たん
じゃないですか。やはり蘭越は、町全体の考え方が進んでいるですよ。

本当の農業ってなあーに

長尾 ゆくゆくは北海道がどんな形であれ農業だったら最高
の地域にならないのかなというも思っていますよね。やはり農
村に住みたいし、お金には代えられない物がたくさんあるんですけ
れども、同時に農村に住めない理由としては働く先がないとか、農業に
新しく参入するにしてもお金も時間もかかる。地元の人に会うと「俺
は若いながらもここで職があったから生活できる」という声を聞くん
ですよ。

農業は専業農家で大きくやっていて東京とか大阪に出しているの
がすごいという、わからないけれどもそういうイメージがある。専業
じゃないと本当の農家ではないのかなと。「兼業でも直売所だけでも
収入があればそれだけでもいい」とか言つと、「本当の農業をわかっ
てない」とかよく言われるんですけども、「本当の農業ってなあー
に」といつも思っていますよ（笑）。

藤原 でもこれからは形態も変わってくるから、規模とかだけ
にこだわらないで、それこそ少ない面積でも所得率を考えた時にはい
ろいろな形態が考えられますよね。「ツッカイ」がいいことだ”で
はないですよ。

太田原 その辺をまったく新しい価値観でやっているのが新規参入の人たちですね。この人たちは絶対に大面積をやるうとはしないし、出面さんを雇ってやるうとはしないし、できれば地域の人たちに食べていただいて喜ぶ顔が見たいという価値観でやっているからね。そういうものが育つ農にはなってきたらいいと思いますよ。

藤原 うちの若い人も新規就農で施設園芸でなかったものだから、二畝の土地を持たなければならなかったんです。その時に農業委員会で結構探めたのは、私はその人が何をやるうとして知っているか知っていたから、「有機無農薬栽培で二畝もどうやって管理できるんですか。ましてや出面さんを入れるわけでもなし自分たちでするわけだし、そんな二畝もなくともいいじゃないですか」と言ったんですけれど、「いやハウスを建てないで施設園芸でないからだめだ」ということで、二町歩借りたんですよ。それでどういうふうになっているかといったら、他の作物の他にソバを撒いたんです。ソバの実をつけるのではなくて、ソバ摘み菜でこれくらいの時に収穫しちゃうんです。それはおしたしとかにして食べるんですよ。

太田原 今、それ結構はやっています。

藤原 そういうソバ摘み菜でいただくことを、私もそうだったけれども地元の人には知らなかったんですよ。二人とも埼玉と横浜の人たちだから向こうの両親に送って、両親から「〇〇さんでお客様を増やしてもらって、産地直送でジャガイモやトウキビ、カボチャなどを

送っているんですよ。あとは自然食品のスーパーに卸しているんですよ。私は地元で「地産地消友の会」というのを立ち上げているのでイベントをやるんですよ。そのイベントの時にはお母さんたちがお店を出しに行くんですが、お父さんがこの頃手伝ってくれるようになったというのは、常設の店舗がないのでお店を出す前のテント建てがあるわけです。早めに行ってお父さんたちがテントを建ててくれる。もう一つは、資料を作ったりシールを作ったりするのを、お父さんがパソコンでやってくれるというお家も出てきて、本当にお母さんたちのやるうとしてやっていることを、少しずつ理解してくれているのかなというのも出てきましたね。

男は理屈、でも女は感覚で勝負

及川 私は「みんな、どんな物を食べたがっているんだろ」という話をよくするんですよ。やはり美味しく食べてもらうためには、食べたいと思っているニーズをキャッチしなければと思って。たとえば、酪農だったら美味しい乳を出すということ一筋に突き進む、自分の作るものにはものすごく責任を持った職人のような人の作った牛乳を飲みたいと思っている人はぎつと多いと思うんです。

そういう人たちの牛乳はちゃんと農協に出荷されて、工場で牛乳パックになって商品として流れてきている。だから牛乳パックの牛乳はその職人の味はずなんだけれども、そういう捉え方をされていないでしょう。どこにでもあるものとか流通しているものとか。「それ

はね、農協が「Aって言うから悪いんじゃない」と(笑)、お母さんたちとそういう話になっちゃったんですよ。」農協という職種人扱い響きだけでも、「Aという工場っぽいよね」と。でもお父さんが帰ってきてその話をしたら、「その根拠は何だ」とか(笑)、感覚ではわかってもらえなかったんです。

そういうイメージというのは、買うのはお母さんたちだから女の人で感覚でそう感じてしまうものってというのは結構大きいですよ。お豆腐でも「正直村」って付いていると、何となく手に取って力こに入れています。

長尾 それって感覚ですよ。何となくわかります。

ところで、忙しい時に何を削るかというと先ず食事の時間を削るんですよ。作る時間を削るとか食べる時間を削るとか、コンビニに行って買っちゃうとか。私は、日々そういう誘惑と闘っています。いかにコンビニを使う回数を減らすかということなんです。町場にいるとお金さえあれば食事の時間を削るといいうことが成立しちゃうんですけども、農協はお金を持っていても成立しないじゃないですか。店は閉まるし、スタンドとかも札幌は二四時間やっているけれども、地方に行くとき必ず五時とか六時に閉まるからガソリンを早く入れとかなきやならないとか。町場で暮らしているし、食事の時は畑のことに思い馳せるというのを忘れちゃってますよね。しなへても生きていけないので。

及川 やっていても忘れちゃう(笑)。

長尾 でもそこでもう一度じっくり自分の食べる物のことを考えたりすると、生き方を考えたり、両親に対してとか、回りに対してとか環境に対してとか、徐々に意識が広がっていくような気がするんです。それも自分に近い所からゆっくり広がって行って、じゃあ少しシャンプーとかも変えなきゃだめかなとか、お洗濯の石鹸とかも変えたほうがいいかなとか考えてしまうんです。最初はそんなことは全然関係なく、自分が一番きれいになる状況とか自分が都合の良い状況を考えていくんですけれども、いろんなものを見ていった中で農村部、農協の人たちという関わるところで徐々に自分がこれからどうしていかかというのを問われているような気がします。そういう部分で農村にはしっかりとあるし、都会の中にも、もしかしたらひっそりあるのかもしれない。そういった部分にもう少し眼を向けていきたいなあと思います。

「無農薬の物を食べたい」と安易に叫んでいたこともありましたけれども、農薬をかけて誰が一番被害があるかという、農家の人が直接農薬を被ったりするんですよ。そういうことも知った上で、もう一度自分がどういふふう食べていかとか、どういふふう農業と関わっていくかということを考えていけないのかなあと取材していています。

そういう中で、自分が農村を訪ねたとき気兼ねなく行ける場所とか人を、いつも作るう意識しています。今でこそ道の駅がありますけれども、最初の頃は何もなかったんです。たとえば突然愛別にいきますよね。どこかの定食屋か駅かそういう所しかなかったんですよ。ではそこで交流があるか、農村のことがわかるかといったら、それは

わからないですよ。ちょっとオシャレな食べる場所があるとか、ちょっと休憩できる所がある、ちょっと思い立ったら体験する所があるというのが、その町その地域にあつたらいいないつも思っているんです。

太田原　そろそろ時間なので、これからの夢をぜひ聞きたいと思っておりますが、長尾さんからお話してください。「九州の村」というなかなか素敵なお話を手伝っているそうですね、それに触れたお話も聞かせてください。

農村で日々暮らすことの凄さを伝えたい

長尾　自分は農村が嫌いで農村を出た負い目もあるというか、札幌で働いてすぎずした二〇代を送っていたんですけども、その中で自分を見つめ直すチャンスをもったり、考える機会を与えてくれたのが農村であり、そこで暮らす人たちがたっさんです。だからそういう人たちが普通に持っている物をもう少しおすそ分けしてもらいたいなということ、逆に何か都会に住んでいてもお役に立つことがあればぜひとも関わっていききたいという気持ちがあります。強く、その橋渡しになるようなことがしたいなあと思っています。私の場合短い期間だったけれども、取材をして町の人に農村の情報を伝えるということをやっていた関係から、実際にその本を読んで移住されて来た方にも会っていきまして、そういう橋渡しになるよ

うな本というものにちょっとこだわっています。

北海道が好きになったりすると、多分もっと北海道の物を買う人が増えたり、もっと北海道に来る人が増えるのではないかと思っています。そのためには、北海道は「すごいんだぜ」ということをいろんな人に伝えていこうかなと思っています。農業の大変さとかそこに日々暮らすことのすごさとか、農家は自分と本当に関わっているんだということを伝えるものを作りたいなあと思っています。

実はこの「九州の村」という本に出会ったのはなんと北海道の農家さんの家です。しかもすごく元気なお母さんたちばかりで、「こんな家があるのよ。北海道にもあるといいわね」というのにも触発されたりしたのです。この本にでてる地元の人たちが普通に食べている物が実はすごいのですが、「こんな普通のね」と言っているお母さんたちの逞しさみたいなものに「すっげえ」と感動したのです。



九州に行って、数々の美味しい物や棚田の景観に感動したりして、もう一回北海道に戻って来た時に、北海道にもそういうのがたくさんあったということに気づいたので。じゃあ私はやっぱり北海道のすごいもの、そこで暮らしていくために生まれた技術とか伝統とか、いろいろなものがあるから、それをもっと楽しくといったら変ですけども、伝えていけたらいいかなあと思っています。

太田原 ぜひ実現させてください。お手伝いします。
 では、及川さんがこれからやりたいことを紹介してください。先ほど藤原さんが話されていた「新規参入者が与える影響」みたいな話を聞いての感想も交えてください。ああいう話を聞くとやはり自信を持つでしょう。

当たり前と言う感覚から脱却して

一から勉強

及川 自信というか、とにかく続けていけたらいいなと思って一年一年やっているんですけども。今まで農業という職業はすごく遠い世界だったんですけども、自分がやるようになって、今まで自分は消費者だと思っていました。今度は生産者になった。でも生産者でも消費するし、消費者だって生産に関わったってかわらないのではないかと今年一年感じましたよ。自分が消費者であった時のこと、生産者になったと思い込んだ時のことを考えても、作るの専門、食べるの専門という感覚しかなかったのですね。新聞やテレビのニュースでは、「これは危ないから食べてはいけない」というニュースしかどうしても出ませんよね。そういうものにすごく敏感になって、自分が食べたいと思う物を選ぶ基準というのは何だったのかなと思った時に、やはり値段ではだめだなと反省しているんです。手近な物でお金を出せば買えるんですけども、ちょっと考えて食べてもいいのかなと、難しいですよ。地産地消とかス

ローフードとか、言葉はよく耳にするようになりましたけれども、そういう意識を普通の感覚にまでするというのはとても難しいと思うんです。その時に、新聞だとかニュースだとか雑誌だとか、眼や耳の刺激というのはすごく大事だと思うので、私たちは物を作りながらですけれども、なるたけそういうことは口に出して言おうと思っています。農家の方は言わないですよ。

消費者の人たちも何を基準に買っているのかということ、声にしては伝えられないですよ。そして今中間地点にいるのは流通なんです。そこでは売れる物・売れない物をきっちり分けてしまうんです。売れた物が売れる物というふうになっちゃってますけれども、じゃあ消費者のお母さんたちが買っている物って本当に欲しい物を買っているんだろうか。

「土農工商」という言葉がありますよね。小さい子どもに聞いても中学生ぐらいの子どもに聞いても、農は生きる生命産業だと言っただけでも、農家仕事は土で汚れるから嫌という子どもも出てくると思います。農業の大切さは知識にはあっても意識にはないんですよ。農が大事というのは教えられちゃって覚えているだけで、本当に思っていない。

今の私は、知らないことがまだいっぱいあるんです。知らないことは聞こうと思っています。たとえば、農薬ってどうやって作られているのかってこういうこともわからないので、若妻会のみんなで「今度、化学肥料の工場とかに、視察とかしてみよう」という話になったんですけども、誰もそんなことしたことないんです。作っている現場がどんな所かも想像できないんです。だから分からないことや知らないこと

には積極的に取り組んでいこうと。あって当たり前で、使って当たり前前という感覚から、なぜ自分がそれを使うのかということを考えていくようにしたいと思っています。

太田原 そういうことを考えていけば、水俣病なんかは出なかつたかもしれないですね。あれはまさに肥料工場が出したわけですからね。やはり若い世代で行動を起こしていくということになりますかね。最後になりましたが、いままでのコメントを藤原さんをお願いします(笑)。「これからやろうと考えていることなども一緒に」。

“食育”を発信する施設を作りたい

藤原 本当に知らないことを聞くということはすごく大事なことなんですけれども、今まで何十年も農業をやってきたら、たとえば農業に関しても使っているから知っているって周りも思っているし、自分たちも今さらという思いがあったと思うんです。そういう中でやっぱり新規に農業を始めようという人は、その時が何歳であつても一からの出発だから、やはり聞きやすいし疑問も持ちやすいし、素直に持つた疑問をぶつけるということが大事なことだなあと思いました。

そういうことでは、自分の財産形成ということも大事です。肥料や農業の勉強をするのと同じに、もっとお母さんたちは年金のこととか保険のこととか遺産のこととかも勉強が必要だと思えます。全道の農村女性が札幌に集まって情報交換をする「農村女性フェスティ

バル」というのがあって、そこで「自分名義の土地を持っていますか」と聞いた時に、手を挙げた人は一人だけだったんですよ。その人は自分で自分名義の土地が持ってたかというところ、旦那さんが死んでやっと自分名義の土地を持てたということです(笑)。笑い話とも言える状況でしょう。だから私はもっとお母さんたちがそういう分野にも意識を持って、自分の働いた労働対価というものを適正に請求するというか、貰ってもいいのではないかというふうな、そういう勉強会もこれからは必要ではないかと思っています。

スイスに行った時に、農村婦人連盟というのがあって、女性のリーダーを育てる講座というのがあって、そこでは旦那さんと結婚する時に契約書を交わすという話が出たんですね。私はまさにこれは今、日本で行っている家族経営協定だなあと、本当によくわかつたんです。そういう契約書を交わせる勇氣ある女性を育てていくということも、スイスの農村女性と日本がタイアップしてやっていけることなのかなと思つたんです。もう一つは、スイスの農業人口は四%ですが、スイスのイメージといえば「アルプスの少女ハイジ」のイメージとか、ゆつたり牛や羊が草を食んでいるきれいな牧草地という情景ですよ。そういうことはスイスも大事にしているんですよ。だから環境直接支払制度というのがあって、それで自分たちもあいう景観を守っていくことができるということでした。

今、「米政策改革大綱」で売れる米を作らなければだめだ、売れる農産物を作らなければだめだと言っているけれども、私はその中に景観もあつてもよいのではないかなと思つたんですよ。農産物は輸入できても景観とかその田舎で生きているホタルとかの生き物は、そ

の景観をなくしてしまつたら取り返しがつかない。それはまったく輸入できない物なんですよ。だから私は、この間役場の方から地区懇でどういふふうによつていったら良いかと相談があった時に、売れる農産物を作ることも大事だけれども、景観もぜひ対象に入れてほしい、景観作物も売れる産物の中に入れて対象にしてほしいということ強く言いました。

ところで、「食べる」ということは一日三回、三六五日、一年間に千回は食べることです。本当に食べることは大事なことだし、それは農業とも直結していることから、それを何とか大事に育てていきたい。食育というのは、体育とか知育と同じように大事ですよ。新聞などで見かけますが、「一人で食べるより何人かで食べたほうが一品おかずが多くなるとよね」という共食、共同で食べるということの大事さです。私も若い人たちと持ち寄りで夕食会をするんです。持ち寄りだから、私と夫とばあちゃんと三人で食べるよりは、四家族が集まつたらそれなりに品数も多くなるんですよ。だから私は、そういうことから「食育の大事さ」を伝えていきたい。

それに、「地産地消友の会」もやっているんです。地元には、いろんな給食を配っている老人施設とかがあります。そういう中で地元の物を使ってくださいとお願いしています。町が委託している先ならなおさらのことです。お母さんたちとその特養(特別養護老人施設)に行つて話を聞いてきたんですよ。及川さん家のアスパラは良いんだけど「今日アスパラ何kgお願ひします」とか、個人的に電話で注文して個人的に持って来てもらうのはなかなか大変だということなんですよ。その中でも、「まとめてくれたら地元の物を取れないことも

ない」と言っんですよ。一ヶ所にファックスで注文を送つたら、農家のほうから様々な野菜などをまとめて何時に納めることができるというんだつたら、「地元の物をとれないこともない」という返事ももらったんです。

それで私は、その農と食の拠点となる仮称「食育センター」というのを立ち上げることが夢なんです。お年寄りに地元の物ばかりで作つたお弁当を配食するとか、地元の給食を作っている所には地場産の物を使つてもらうようなコーディネートをする人がそこにいればいいと思います。お母さんたちは作つたりするのはすごく上手です。だけどそれを商売に結びつける手間ひま、時間がなかなかとれないんです。だからそういうことをコーディネートしてくれる拠点が必要だと思っんですよ。娘夫婦がうちの仕事を一緒にやるということになれば、私はまた一歩夢を実現させることができるのかなあと、今はそつちのほうに頭が向いているんです。私はそこでもうひとふんばり、次の子どもの教育のためにも、食育ということ、町の人に発信する施設をつくるのが夢です。

太田原 ありがとうございます。食育センターの話、雑誌の話、それから若い世代のお母さんたちのグループの学習なども、私自身が関わってきたこと、またこれからやりたいなあと思つていることと皆さん方の夢が一致しましたので、大変わが意を得たりと思ひました。皆さん方のお話から農業・農村の輝く時代が薄つすらと見えてきたところで名残惜しいのですが、座談会は終わらせていただきます。どうもありがとうございました。



(写真右より)

プロフィール

Profile

長尾 道子

「食農わくわくねっとわーく」事務局長
エッセイ「北海道大好きな旅」NO 45～48連載

太田原高昭

北海道地域農業研究所所長、北海道農業顧問
北海学園大学教授、北海道大学名誉教授

藤原 幸子

愛別町農業経営（酪農）、愛別町議会議員
北海道指導農業者（平成7年度認定）

及川かをり

蘭越町農業経営（野菜）平成13年新規就農
エッセイ「農業は感動産業です！」NO 49～連載中

あなたはどう見る 「母ちゃんパワー」

兎 老児

既婚日本男性の多くは、その配偶者、つまり力アチャンに対して、口に出すかどうかは別として、夫である自分への対応について【感謝している六〇%、不満だ四〇%】くらいの評価をしているものと筆者は体感的な独断と偏見で予測をしてみました。いや我が家では違うという異論、反論があるものと思いますが・・・さて、農業・農村の家庭内、あるいは地域での女性、とくに力アチャン達に対する男性陣の評価やその置かれている地位について考えてみましょう。

一九九七年（平成九年）に、「男女雇用機会均等法」が制定され、北海道においても「北海道男女共同参画プラン」が策定され、農村女性に関する課題項目として以下の四点が強調されています。

- ① 男女共同参画に向けたあらゆる場における意識と行動の変革
- ② 政策・方針決定の場への女性の参画の拡大
- ③ 女性が住みやすく活動しやすい環境づくり
- ④ 女性の経済的基盤と働きやすい環境づくり

ここでは、男女を問わず農業・農村の担い手が、その持てる力を十分に発揮するとともにその成果が適正に評価される社会を築くことの重要性と、そのための個としての主体性の確保と性別による固定的な役割分担意識を是正する具体的な行動を求めています。また男女が対等のパートナーとして認め合う社会を実現するために、女性の意見を地域社会に反映させ、政策・方針決定の場へ

の女性の参画拡大が急務だとしています。

以下では、この高らかに謳われている建前・理念と農村現場での実態のギャップを男性（経営主）の意識・意向の中から、考察してみましよう。

女性（カアチャン）の経営参画や社会参画に関する経営主（トウチャン）の考え

専門的農業が主体の道北のある町で昨年行なったアンケート調査で、女性（カアチャン）の経営参画について意識を確認していきますので紹介します。

- ①積極的に経営参画すべき：六六・〇%
 - ②経営は男性が行なうべき：六・九%
 - ③わからない：一六・〇%
 - ④無回答・その他：一一・二%
- という結果でした。

農作業や経営記帳に実質的には男性を上回って従事している実態から見て、六六%という肯定的意見は当然と言えば当然の数値と言えらるでしょう。

次いで、女性を審議会委員、農業委員、農協理事等の公職に就くことについての考えを見ました。

- ①積極的に参画させるべきという積極是認派：一五・〇%

②性別にこだわらないという消極是認派：五九・七%、合計で七四・七%となりました。 対する

- ③男性が主体であるべきという積極的否定派：三・九%
- ④女性組織の代表を公職に就かせたら良いという消極否定派：一一・三%、合計で六・二%。

⑤わからない：一一・一%

⑥無回答・その他が七・八%でした。

総じて言えば、カアチャンパワーの実力を認める、あるいは認めざるを得ないというトウチャン連の意向が素直に反映された結果だと考えられます。

しかし、例えば経営形態別に見ると、「酪農専業」では社会参画肯定派は経営参画の場合と異なって必ずしも高い是認を示しておりません。経営参画は経営内でパートナーシップを発揮すれば良いが、女性の公職等就任となれば経営外に出る機会が多くなり、周年的に労働条件がタイトな酪農経営の場合、簡単に容認することが出来ないのではと推察できます。

一 一 カアチャン達の経営参画・社会参画の状況

近年の経営参画の実績を示す具体的なデータではありませんが、一つの指標として「家族経営協定」の締結状況（農水省調査）について見ますと、二〇〇三年（平成十五年）現在、全国では三五、

一五二戸で、前年に比べて二七%、三、五七六戸増加しています。ブロック別では九州が最多の七、六九五戸、次いで関東の六、八七三戸で、わが北海道は三、七五九戸ですが前年に比べてほぼ横ばいという状況を示しています。ちなみに事例の町の実績（農業委員会調べ）では、平成十四年までの累計で二二戸でした。農家戸数に対する締結農家率は必ずしも高いとはいえません。

家族経営協定の内容は、農業経営の方針決定や、労働時間・休日の取り決め、役割分担、労働報酬の取り決めが中心となっていますが、経営内の女性や後継者の位置づけを内外に宣言するもので経営参画の状況を明示するものとして締結を推進することが望ましいのではないのでしょうか。

また、「女性の認定農業者」数も一つの指標となりますが、北海道では二〇〇二年（平成十四年）実績で一八〇人（比率は一・〇%）です。先の事例の町では六人（一・五%）でした。

次に女性の社会参画の指標として挙げられる農協の女性理事は、二〇〇三年で北海道で六人、比率で全国平均を下回っています。農業委員は二〇〇二年（平成十四年）で北海道で六九人、女性比率は二・二%（全国では三・八%）となっています。

三 カアチャンパワーが新しい風を呼ぶ

家族経営協定は、給与や休日といった家族一人一人の権利と責

任を明確にし、文書による取り決めを結ぶものですが、これは、農業を「家業」から「経営」として見直すきっかけになります。九四年に家族協定推進事業が始まったことで、協定を結ぶ農家が増加していますが、それには「農業者年金加入のメリット」も、追い風となっています。この協定で、所定の事項について取り決めを結べば、雇用者として女性の年金の加入が可能となったのです。さらに、こうしたシステムは、若い後継者たちにも励みになると考えられます。

彼らが両親の元で農業を始めるに当たって、自覚を持って取り組むためには、将来の経営委譲や労働評価に関する取り決めは不可欠なのです。働いた成果が収穫という形で目に見えるのが、農業の良い点ならば、その報酬についても同じことが言えるでしょう。

現状では、多くの農村女性（カアチャン達）にとって、経営主のパートナーとして、あるいは最近増加している農業法人の雇用者として、十分に、かつ正當に評価されているとはいえない段階です。それは家族経営協定も法人化も、経営者―男性、雇用者―女性という状況を固定化する傾向も強く、その評価は依然男性（トウチャン）中心なのです。

これに対して、全く違った価値体系のシステムが「女性起業」です。農村における女性起業は、近年ますます活発化し、全国では九三年の一二五事例から一〇年後の現在では一〇倍以上に増加しています。

全国で展開する女性起業は、大別すると六つの類型に分けられます。「農業生産」「食品加工」「食品以外の加工」「流通・販売」「都市との交流」「サービスマ」です。

事例を見ると、平均像としては、五〇人前後の五〇歳代を中心とした女性たち（カアチャン達）が、生活改善実行グループや農協女性部を通して仲間づくりを行い、一〇年ぐらい前から「地域おこし」と「仕事づくり」を意識して活動してきています。その多くは、起業に至るまでに、長いグループ活動の下地があったことを注目したいと思います。

身近な農畜産物の余剰品、自然環境、暮らしに密着した食文化や生活技術などの未活用資源を生かした事業内容をとっています。メンバーの社会的意識も非常に高く、「農産物へのこだわり」と「地域の活性化」などに力点を置いているのです。こうした農業の外部的効果を生かした女性自身の仕事づくりは、農業発展に寄与するばかりでなく、これまでシャドウ・ワークとみなされていたものに経済的意義を見いだした点でも、画期的だと言えましょう。

また、彼女達の組織は非常に柔軟で多様性を持ち、横のつながりを重視する傾向が特徴で、メンバー全員が出資し、役員や仕事の分担についても全員で話し合い、決定する仕組みをとっている事例が多くなっています。これは従来の雇用関係とは違った全く新しい形の働き方、すなわち「ワーカーズ・コレクティブ」という方式です。八〇年代に、男社会と違った働き方を求める女性の活

動の中から生まれたこの方式は、まさに農村女性起業にピッタリなシステムなのです。

今後の課題は、これをどう持続的発展につなげていくにかにかかっています。

カアチャンたちの、仕事の社会的意義への認識は強いのですが、残念ながら自立志向は弱いのです。経済利益に関してもまだ副次的です。

「農業生産」に関わる起業には、若年女性が単独で始める事例も多く、女性の収入確保に力を入れている点が注目されます。主に中高年の女性が、伝統的役割の結果である「女性の特性」を生かした仕事づくりがほとんどであるのに対し、若年女性はこれまで女性に開かれていなかった分野に積極的に進出している点でも新しい波と言えましょう。

今後、「食品加工」など他の分野でも、こうした意欲ある若年女性や男性（トウチャン）たちをも取り込んでいく体制づくりが求められているのです。

今の農業を救うのは、変革の主体となる意欲能力を持った「ヒト」なので、両性が互いに認めあい、協力することで、力は何倍にもなるのではないのでしょうか。カアチャン自身が変わり、トウチャンを変え、地域を変える。地域が社会を変えるのです。

まさに「あなたがやらなきゃ誰がやる」のです。女性の能力それ自体が、農村の大きな大きな未活用資源ではないのでしょうか。

「農業は感動産業です！」

最終回



蘭越町 農業

及川 かをり

清冽な白い雪景色の農村風景は、花嫁衣裳の白無垢のようだなあとおもいます。欲心や迷いを捨て、静かに心を清めて春を待つ白い田畑は、そのまま農民の生きる姿のようでもあります。

二〇〇三年羊蹄山麓の冬は、師走にはいっても積雪がありませんでした。苦悩や迷いをなかなか白紙にもとせない厳しい二〇〇三年の農民の気持ちをうつしているようでした。それでも直にちらちらと白いものが一面をおおい、いま白一色の冬を暮らしています。

雪の大地は、また新しい一年の希望をたたえて、農村はちらちら強い春の息吹を迎え入れることでしょう。冬の農村は神聖で美しく、農民はたくましいなあとおもつのです。



雄大な大地を舞台にのんびりと平穏な日々を暮らしているようにイメージされがちな農家ですが、そのおだやかな表情のなかに奥深いと感じています。米の凶作、価格の低迷、色々あった一年の苦勞が報われないからと、くよくよ不幸な顔をしている人がいないのです。

わが農園のたよりのなさにへこたれているわたしたちを気づかす、大先輩から、こんなもうちからん商売やつられねえべ、とおだやかに語りかけられることがあります。少し戸惑ったわたしたち、先輩達の謎の微笑みはたくましい農民魂なのでしょう。平常心で現実を受け止めて、立ち止まる事なく歩み続けていきます。着々と大胆な計画を練つ



及川 かをり (おいかわ かをり) さん

札幌市生まれ

1998年より蘭越町富岡在住

夫 肇 41歳

長女 知香 中1

長男 洸一郎 小6

次女 智世 小1

2.2haの農地で約30種類の野菜栽培

ている時も、農民の表情はとてもおだやかなのです。能ある鷹は爪を隠し、大胆不敵、じたばたしない様子がとてもカッコイイのです。

いちいち笑ったり泣いたり、おろおろ、じたばたしたりしている及川農園は、まだまだ農家の幼虫といったところです。



冬場のこの時期は、反省会と銘打った飲み会や会合があちこちで催されます。農家を続けていくことの厳しさに、すっかり消極的思考になっているわたしたちにとって弱気や邪気を振り払う襖（みそぎ）の場です。ここでは鍋を囲みながら、いつも寡黙に田畑と向き合っている温厚な農家のおじさんたちが多弁となって、農業の可能性や夢を

熱く熱く語り合って盛りあがります。話を聞いているだけで、なんとかなるんじゃないかなと元気がわいてくるのです。皆の一本締めで納会となるころにはすっかり意気揚揚向き思考となって家路につきます。

どこまで本気の夢なのか、夢という言葉がしっくりこないので、辞典を引いてみました。DREAMでもFANTASYで



農村の明日を考える会合



農村サロン アフター



お手伝い



農村サロン ビフォー

もなく、CONCEPTIO

もです。

N?...そうか、これが農村VISIONというものなのかな。

冬、及川農園主はパチンコ(情報交換)やマージャン(地域交流)、建築実習と多忙な毎日を送っています。建築といっても

とおもっていた農村ビジョンでしたが以外にも身近にあり、農民たちのそのおだやかな表情からは想像もできないほど壮大な計画でありました。農民は前向きでたくましい、緻密で大胆な人々です。

建築現場のアルバイトに行っているではありませんよ。なんと、及川農園サロンを造っているのです。サロンの使用目的は定かではありませんが、及川農園のさらなる活動の場なのだと思います。

農村将来図設計会議は、今日もどこかで開催されているものです。

事の始まりは、使っていないかった古い納屋でした。納屋を改造して畑をながめながらコーヒーを飲みたいという農園の応援団が、及川農園ビジョンを積極的に設計・施工、後押しというより先行するかたちでのリフォーム計画が始動したのです。

余談ですが、ハジメさんの解説によると、冬場の農村では数々の反省会のほかにも農村の明日を考える会合(マージャン大会)が話題に尽きる事なく盛んに開催されているようです。また、情報交換と称する会合にはパチンコ店が使用されている

もとより、計画専門の及川農園主ですから、建築専門家応援団

のみなさんがリードして下さらなければ、夢のまままで終わっていったことでしょうか。

貴重な土日をさいてトンカチをふるい、木造納屋の改造を樂しむ彼等は、空港や高層ビルといった桁外れに大物を扱う専門家です。美味しい物を食べるのが大好きな建築士たちなので、恐れ多くも報酬は、トマトやトウモロコシです。三年計画

の手作業は難航する事態までも楽しんでいらっしやるようので、順調に進んでおります。



我が家の子供達が最近好んで見るテレビ番組があります。『へえ〜ボタン』という玩具も売れている人気番組なのだそうです。

農家を志してから我が家の暮



サロン

らしの周辺には『へえ〜』が氾濫しています。

たとえば、カエルが鳴く夜は気温が二三度以上あるとか、一坪は一人が一日に食べるお米を生産する田圃の面積で一反は一年分の米を基準に定められた歴史があるということなどなど。

そもそも種をまいて作物を育てる過程のすべてが、『へえ〜』というところからスタートしたわたしたちです。どうして畑にビニール（マルチ）をひくの？とか、水のかげんや天気と同じ一本の木からとれるトマトの味やかたたちが毎日かわるという『へえ〜』な話題もトマトといつしよに産直しています。本日のトマトは水やりを抑えたので皮は少々かたいのですがうまみには自信があります、と野菜の直売をしながらこれらの話題

を都会の奥さんたちと共有しています。

スーパーでは、形のよい野菜でないと売れないといわれていますが、形がよくておいしいうだから選ばれているのだとおもいます。わたしもかつてはそのでした。結果みかけのわるい野菜には値がつかず、かたち重視の生産をせまられるという農家の実情はわからないままでした。おいしいものが食べたいのだというおもいは、農家に伝えるすべもありません。産地や栽培履歴の表示にしても、安心して食べられるということがあたりまえでなくなってしまう結果だとおもっています。安心でぎないような、悪い話題がニュースや新聞で大きくとりあげられれば、安心を求める声があがるのも当然のことだとおもいます。産地



尊敬する
鈴木さんご夫妻

表示や認証マークで、生産者と消費者が交流できていると考えるのは寂しいです。

道産のお米のイメージも、情報を提供する努力によって改善され、消費が拡大しています。消費者は「おいしい情報」をもっともっと求めてくれるとおもいます。

日本人一人あたりの米の年間消費量が年々減少しているとか、農家の後継者がいないという話題も都会の奥さんにとっては「だから？」と言ったところではないかと推察します。農家でないお母さんたちにも興味をもってもらえるよう、農業をもっと身近に感じてもらえるような努力をすれば、農村や農業の話題でいっしょに「へえ」と言ってくれる人の輪が広がるのです。



農家は、社長・科学者・職人・芸術家であり労働者という具合にたくさん顔をもっています。わたしの周知の範囲ではこの他に議員さん・スキーインストラクター・土木会社社長・大工さん等、広範囲で活躍している巨匠農家が存在します。どの方にも共通しているのは、温厚で寡黙、仕事の評価は結果を見てくれといった気質です。結果は良くてあたりまえという仕事に対する誇りも共通項です。今のところ、温厚・寡黙・結果のどれをとっても、及川農園は未熟者です。

農家の世界にはいつて、尊敬とあこがれは日に日に強くなり、修行を積む毎日に喜びをおぼえています。しかし、農家は一日

にして成らず、農家への王道なし、農家は奥深いのです。

わたしたちの就農を手厚く応援してくださる先輩農家の方々や野菜を食べて下っているみなさまに導かれて、及川農園が行きつく所がどこなのかは、まだわかりません。農家としての暮らしたが、まだまだ目新しいわたしたちですが、だからこそ感じられる感動があります。

頑固は職人氣質、理屈っぽさは理論的、身勝手は芸術肌と言ってはばからない、しかも寡黙でもなく結果も出ないハジメさんも、サラリーマン時代からみるとすいぶんと清められて柔らかな顔つきになってきているようです。こうして農家への道をたどりながら、農村に魅せられ長く暮らすうちに、わたしたち及川一家が今感じている感動も



冬の畑

あたりまえとなっていくのかも
しれません。

わたしたちには農家の人々に
もそつでない人々にも今伝えた
い思いがあります。

農業は感動産業です！そして、
この感動はみんなでもっともっ
と感じてほしいと。



思ったことを書いていいです
よという編集者のお言葉に、思
いつくままに稚拙な文字を並べ
てしまいました。家族からは、
思った事と思いついたままは、
ちがうーと叱られつつ、日々感
じている農のすばらしさをなん
とかお伝えできるようと願
いながらの作業でした。

農業という伝統ある職業は人
が生きるという事、人は生かさ
れているという事のすべてが生

活の中にあるように感じていま
す。人として生きるということ
を学ぶ予定ではありませんでし
たが、おごりを恥じ無知を知り、
少しずつ生きる力がついてきて
いるように感じています。閉鎖
的なのではないかと危惧してい
た農村暮らしでしたが、そこは
何時でも誰でも暖かくつつし
でくれる場所でした。自分らし
く暮らす毎日はいへん充実し
ています。農業農村に暮らすと
決心した夫ハジメさんには、と
ても感謝しています。

みなさまのご厚情に、心より
感謝いたします。ありがとうございます。
ございました。

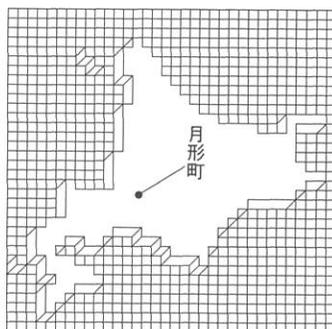
いづれいつかなく春の

作付準備にかかる及川農園

二〇〇四年

及川肇・かをり

連載



あのマチ
このムラ
・地域おこし活躍中

No.35

月形町の事例

—みんな心に花がある「花の里」をめざす—

月形町の沿革と概況

月形町は空知管内の南西部を占める樺戸郡の最南端に位置し、国道二七五号により札幌市へは五〇km、岩見沢市二〇km、厚田村の日本海海岸線に二〇kmの距離にある。

南東は石狩川をへだて美瑛市及び空知郡北村に接し、北西から西南にかけては石狩郡当別町及び新篠津村、北は浦臼町にそ

れぞれ接し一五・六km、南北一九・五km、町の総面積は一五一・〇五kmである。

土地は町の総面積の六〇%が森林で、増毛山麓に源流を発する須部都川、札比内川、厚軽田内川、中小屋川の清流は、石狩川に注いでいる。

気候は内陸性の特性を持ち七〜八月の平均気温は二〇〜二一度ぐらいで、一〜二月の気温もマイナス七〜九度程度であり、四季を通じて昼夜の温度差は著

しいものの、概して温和な気候である。

年間降水量は一、四〇〇mm前後で初雪は十月下旬ごろ、融雪時期は概ね四月中旬となっている。

月形町は、明治十四年石狩川右岸の未開地に明治政府によって国事犯や凶悪犯を収容するため樺戸集治監が設置され、この地を開拓するために移住してきた人たちによって空知管内最初の村が開村された。

初代典獄に就任したのが月形潔で月形町の名前は彼の姓をとって命名されたものです。

人口は四、二九四人世帯数一、七〇八世帯（平成十五年十一月末現在）人口及び世帯数の推移は表1のとおり。

産業別就業人口は第一次産業七九六人、第二次産業三四五人、第三次産業一、一四三人（五〇%）と年々第三次産業の占める割合が増加している。（平成十二年国勢調査）

表1 人口および世帯数の推移

単位：人

	昭和45年	50年	55年	60年	平成2年	7年	12年
全町人口	6,737	6,199	5,599	5,538	5,125	4,869	4,505
総世帯数	1,585	1,532	1,505	1,625	1,693	1,722	1,694
農家人口	3,281	2,602	2,324	2,127	1,815	1,567	1,404
農家世帯数	646	559	522	495	426	366	343

表2 産業別就業人口

単位：人

	昭和45年	50年	55年	60年	平成2年	7年	12年
第一次産業	1,822	1,376	1,216	1,096	974	864	796
第二次産業	606	542	499	440	426	403	345
第三次産業	1,126	1,094	1,112	1,176	1,188	1,196	1,143
合計	3,558	3,012	2,827	2,712	2,588	2,463	2,284

産業別就業人口の推移は表2のとおり。

月形町の

目指すべき将来像

はなの里つきがた

(1)花とやすらぎの

まちづくり

花は、月形町を代表する産物であり、町の文化に彩りを添える自然からの恵みです。また、花は人の心に安らぎと豊かさを与えてくれます。

恵みある花に調和する快適でやすらぐ生活が過ごせるような町を目指します。

(2)元氣と希望あふれる

まちづくり

町の活性化と町民の幸せを達成するために、生活基盤や、環境の整備とともに、経済・産業

の向上から実現を目指し、また、高齢化社会の進展の中で、高齢者が安心して元気に生活できる環境の整備を進めます。

(3) 愛着と誇りに満ちる

まちづくり

人と人が、人と町がこころの交わりと互いに信頼と連携の中で誇りの持てる月形町に育て上げるため、町の文化の向上と人材の育成、町民の行政の参加、町民同士の交流と他地域との交流をさらに活性化するとともに、人と町からの発信を進めます。

具体的なまちづくり

(1) 行政

町政では、町職員や議員だけでなく、町民全員がともに参加・参画し、さまざまな課題の解決に挑戦し、協力しながら執行する、こうした方針に基づき、町

民がそれぞれの立場から意見を交換しあう「ふるさとまちづくり検討会」など、さまざまな意見交換の場がある。町民が一丸となって、笑顔でくらすことのできるまちづくりの実現にとりくっている。

(2) 生活環境

快適で潤いのある生活環境づくりをめざし、公園整備、道路整備や、町営住宅「こすもす団地」を中心とした住環境の整備に力をそそいでいる。

地震・火災などにも迅速、円滑に対応できる体制づくりはもちろん、犯罪者から女性や子ども、お年寄りなどをまもるため、町民の協力を得た「サポートハウス」を設置している。

近年のまちづくりにおいては、環境対策もまた重要課題であり、月形町廃棄物減量等推進審議会を設置し、まちを美しくするた

めのルールづくりに取り組んでいる。

(3) 医療・福祉

高齢化社会が進展する中、「健康で安心して暮らせるまちづくり」は、重要課題として位置づけられている。

月形町には、特別養護老人ホームや老人保健施設などの福祉施設がある。また、保険・福祉が一体となった総合サービスの拠点である「月形町保健福祉総合センター」医療の中心を担う「国保月形町立病院」などが相互に連携をはかり、地域に密着した、福祉・保健・医療サービスを提供している。

(4) 商工業

「まちの顔」としての魅力ある商店街づくりをすすめている。消費者ニーズの多様化や都市部への消費の流出など、厳しい社会背景ですが、商工会の経営改

善普及事業や、地域振興事業などへの助成も行い、商業環境の整備に力をいれているほか、建設業などの地域工業育成にも積極的である。

(5) 花のまち

月形町で花づくりが始まったのは昭和四十六年のこと。その前年に始まった米の生産調整、



はな工房

表3 専業別農家戸数

単位：戸

年度	農家戸数	専業農家	第1種兼業	第2種兼業
昭和45年	646	418	143	85
50年	559	282	204	73
55年	522	248	200	74
60年	495	198	216	81
平成2年	426	157	204	65
7年	366	149	166	51
12年	317	112	159	46

表4 規模別農家戸数

年度	総面積(ha)	3%未満	5%未満	10%未満	10%以上	一戸平均(ha)
昭和45年	2,930	183	225	217	18	4.5
50年	3,000	139	152	233	35	5.4
55年	3,150	120	112	246	44	6.1
60年	3,160	111	97	223	64	6.4
平成2年	3,170	85	83	196	89	7.4
7年	3,150	66	65	146	89	8.6
12年	3,150	54	47	127	89	9.9

いわゆる「減反」により岐路に立たされるなか、苦渋の決断であるとともに新たな可能性への挑戦でした。

しかし当時、寒い北海道で花の生産はほとんど未知の取組であり、花き栽培に取りくんだ農家が一丸となつて、栽培方法から販路にいたるまで独力で開拓。平成三年に生産額が一〇億円の大台に乗つて以降、北海道でトップクラスの花き生産となり、今日では、その生産力と優れた品質が全国的にも高く評価されています。

月形町では、「花の里・つきがた」をテーマにしたまちづくりをすすめている。中でも、花き生産・農産加工と体験観光を結びつけた「はな工房」「つち工房」「みのり工房」というユニークなコンセプトの施設を建設、グリーンツーリズム・農村リゾートなどへの関心が高まる中、まっ



たく新しい試みとして注目されている。

月形町農業の概況

「花の里」として今や全国に知られる月形町ですが、農業生産の約五割を占めるのが米づくり。また、スイカ・メロン・トマトなどの果物・野菜の生産も盛んです。

農家戸数は年々減少しており平成二年に四二六戸あったが平成十二年には三二七戸と二五・六%、一〇九戸減少している。(農家戸数の推移表3)

耕地面積は三・一五〇千ヘクタールで平均九・九畝となっている。(規模別農家戸数表4)

農業粗生産額は三三・二億円(平成十三年度)品目別に見ると、米一七億円(五一・二%)、花き八・五億円(二五・六%)、果菜四・九億円(一四・八%)

麦類一・五億円(四・五%)畜産一・二億円(三・六%)となっている。

地域農業振興計画

JA月形町では合併問題も視野に入れながら将来を展望した地域農業の振興と豊かな農村づくりを目指し、地域特性をいかした農業の振興と農村の活性化を図り、安定的で持続可能な農村体系を構築する。

基盤となる「米」をはじめ、花き・果菜・肉牛など地域内は多種多様な生産が可能であることから、地域が一体となって特色ある農産物生産に向けた取組を行い、将来の担い手、子ども達が夢と希望を持てる月形農業を確立するため、安全・安心・安定した良質な農産物の生産と供給ができる産地づくりと、健康でより豊かな暮らしを実現す

べく、生産性の向上と効率的な流通販売体制を構築し、生産から販売までの一貫体制によるブランド化、出荷ロットの確保と長期安定出荷体制の確立を目指すため、平成十四年二月に目標年度を平成十六年度とする地域農業振興計画を策定し、農業の振興を図っている。

Ⅰ 基本目標

- (1) JA取扱高三〇億円農業をめざす。
- (2) 安全・安心・安定した循環型クリーン農業の推進による、良質な農畜産物の生産と供給ができる産地づくりにつとめる。
- (3) 農業・農村の振興を図ることを通じて、価値ある食糧の生産に努め食生活や地域産業の活性化に貢献する。
- (4) 農業者や農業関係団体の創意と工夫を生かし、住み良

い地域づくりと地域農業の活性化をはかる。

Ⅱ 具体的目標

- (1) 農業所得目標
 - 戸当たり六〇〇万円程度とする。
- (2) 農地流動化対策
 - ・ 地域内の恵まれた土地資源の有効活用を図る。
 - ・ 遊休農地の解消を目指す
- (3) 農業生産対策
 - ・ 稲作
 - ・ 大地のこだわり「情熱米」の生産により、消費者ニーズに対応できる稲作主産地を確立する。(平成十二年一

〇月に最新機器を導入した穀類乾燥調整貯蔵施設「こめ工房」を建設し、良質・良食味米の生産に努めている。

・特産品

花卉・果菜類については、月形ブランドのもと、市場における評価を上げ産地として確立している。この月形ブランドの更なる発展と飛躍のため、高品質

花卉・果菜類等の安定供給を図ると共に、生産コストの低減、クリーン農業への取組等を実施する。

・畑作

土づくり、有機物施用によって合理的な輪作体系確立により安定生産に努める。

・畜産

飼育管理技術の向上、支援システムの充実により効率的でゆとりのある酪農経営を水田農業と並行しながら確立する。

(4) 排水対策・土づくりと

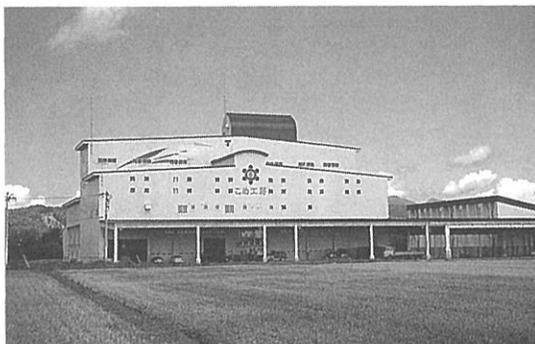
クリーン農業

- ・ 減農薬栽培の取組み
- ・ 合理的な化学肥料の使用と土づくりの推進

・排水対策と土づくり

(5) 安定確収・品質向上のための輪作体系の確立

- ・ 稲作と水田を組み合わせた水田の活用により最大の所得を確保するための対策を講じる。



こめ工房

(6)コスト低減対策

・供給施設資材の低価格化を図り、安定供給に努める。

・販売対策の充実を図り、コスト低減に結びつく所得向上をはかる。

・集団化、機械施設の共同利用を誘導する。

(7)担い手育成対策・花嫁対策

新規就農対策

担い手育成対策

農事組合、青年部、行政等との連携により農業生産活動等により地域の実情に合った多様な担い手を育成・確保する。

花嫁対策

J A、行政、各関係機関と連携を取りながら、多くの出会いの場を設け積極的な参加を促していく。

新規就農対策

地域の実情に即し、各生産組合、J A、行政、各関係

機関と連携を取りながらとりすすめる。

(8)組合員の健康管理と農村環境対策

環境対策

・トイレの水洗化・合併処理浄化槽の設置に係る行政支援対策の資金融資

策の資金融資

・人間ドックの助成措置の継続実施

・花壇づくりによる花いっぱい運動の展開

新規就農対策事業

1 取組の経緯

平成五年度に「新規就農者誘致特別措置条例」、「新規就農実習農場設置及び管理条例」を、

平成八年度には「新規就農者経営開始資金貸付基金条例」を制定し、新規就農のために実習を希望している者を受け入れ、農

業実習の場を提供し、本町の区域内において新たに農業を営み、本町の農業振興に寄与する者に対し、奨励金その他特別な援助を行い、新規就農者の誘致促進を図ってきた。

さらに平成十二年度には新規

就農実習者や新規就農者の招致を促進し、農業生産の新しい担

い手の確保を図るために必要な

支援内容を充実するため「新規

就農者誘致特別措置条例」を廃

止し、新たに「新規就農者招致

促進条例」を制定し、北海道担

い手育成センター、空知中央地

区農業改良普及センター、月形

町農業委員会、月形町農業協同

組合、月形町花き生産組合との

連携・協力のもとに本町の新規

就農対策を講じている。

2 新規就農までのプロセス

(1)月形町で花農家をやりたい

募集条件は「花き栽培に関心と情熱をもつ、二二歳〜四五歳未満で同居の親族を有する健康な方」

(2)月形町役場へ申込み

(3)新規就農実習農場

(三年以内)

花き農家として就農したい方を対象に、栽培技術や農業経営のノウハウを実践的に実習する農場です。農地やハウス、機械施設は無料で提供します。

指導体制は、花き生産組合、

農協、普及センター等が一体となっておこないます。

(4)実習終了(就農の準備)

就農に必要な農地、住宅、機械、施設の準備を、特別に有利な条件で支援します。

奨励金・補助金・経営開始資金の貸付・優先的に農地などの

幹線・小規模長期リース農場事業の利用

(5)月形町の農家として就農

3 新規就農の状況

平成八年に就農した宮下さんをはじめ六名の方たちが花き農家として活躍されています。

樺戸集治監

明治政府は、武力反乱の他、自由民権運動などを基とした政治犯や重罪犯などが急増しはじめ、彼らを収容する施設の設定が急務となってきた。このような中、当時の内務卿伊藤博文は「未開の地に反乱分子や凶悪犯を隔離し、彼らの労力を駆使して開墾し自給自足させれば、監獄経費の節約になる」と政府に提案しました。

そこで、明治十四年石狩川右岸の未開地に樺戸集治監が設置されました。(月形町に集治監を設置した理由①土壌が農業に適していたこと。②石狩川と樺

戸連山に挟まれた自然の要塞。③樺戸連山からは獄舎の材料となるトドマツが多く産出できる。④石狩川の水運で、札幌、小樽との交易が可能なこと。)

初代典獄就任したが、月形潔(月形町の名前は彼の姓をとって命名された。)で明治十八年激務のため、体調を壊し職を降りた。(典獄―現在の刑務所長。当時は絶大な権力を持ち警察署長や地域の自治まで行っていた。)

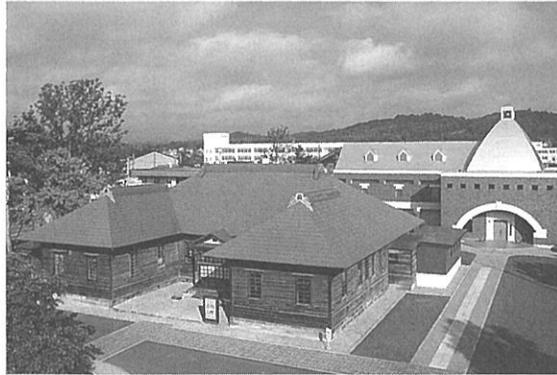
囚人による道路開削や炭坑採掘など、北海道開拓の「前線基地」として、月形町の発展のみならず、道央地区の開拓にも大きな役割を果たしました。

泣く子も黙ると恐れられた樺戸集治監には様々な全国的有名囚が在監していた。

五寸釘の寅吉・熊坂長庵・明治のねずみ小僧・稻妻強盗

等また、こういった極悪囚ばかりでなく、自由民権運動弾圧によって投獄された政治犯も多く在監していた。樺戸集治監は大正八年廃監となった。

旧樺戸集治監本庁舎
明治十四年に建てられた本庁舎は、明治十九年に一旦焼失しましたが、すぐに建て替えられ、現存する建物は大正八年に樺戸監獄が廃監されるまで、事務所として使用された。その後、昭和四十七年まで役場庁舎として使用され、翌年から、北海道行刊資料館として、一般公開されている。



旧樺戸集治監本庁舎

月形樺戸博物館

樺戸集治監の当時の様子を実物資料で展示している。また、有名囚人も多く集監されていたので、そのエピソードなども資料により解説している。

農業研修館

樺戸監獄は農事監獄として、始まっています。月形町の開拓に血の汗をながした先人たちが

表5 観光客の推移

単位：人

区 分		平成 10 年度	11 年度	12 年度	13 年度	14 年度
合 計		315,000	294,400	320,000	278,100	270,400
日帰・宿泊別	日帰客	298,000	278,200	303,500	262,800	254,700
	宿泊客	16,600	16,200	16,500	15,300	15,700
居住地別	道外客	4,700	2,600	2,000	1,100	1,700
	道内客	310,400	291,800	318,000	277,000	268,700

の記録を展示しています。

月形町の自然

道民の森月形地区

陶芸館や木工芸館で気楽に工作出来るのが魅力。粘土をこねて形づくりをしたり、板に釘をうちつけたり、林業体験やキノコの観察も出来る体験の森です。

木の香りただよう快適なバンガローや、常設テントサイトがあるので、研習の場としても利用できる。

月ヶ湖

(北海道学術自然保護地区)

月ヶ湖は大沼と小沼の二つからなっていて、多くの湿性植物が生息している自然豊かな水と緑の湿地帯です。周りの森にはたくさんの野鳥たち

が住みバードウォッチングを楽しむことができます。また、春には白鳥が飛来し、その優雅な姿を見せてくれます。月ヶ湖は昭和五十年に北海道学術自然保護地区に指定されました。

観光・イベント

月形町では平成六年月形町振



月ヶ湖

興公社を設立し月形町温泉ゆりかごをはじめとする町有施設の管理・運営に当たり観光客の誘致に努めています。(観光客の推移表5)

観光

(一) 月形温泉ゆりかご

奇数日、偶数日で男女が入れ替わる造りが違う大浴場とそれぞれの露天風呂など充実した設備を有している。

(二) はな工房

はなの里の宿泊研修施設でアレンジフラワーや押し花、ドライフラワーなどが体験できます。もちろん宿泊も出来ます。

(三) つち工房

つち工房は、農業体験施設で、オーナー農園やガラス張りの温室があり自然を肌で感じる事が出来ます。

(四) 多目的アリーナ

土間の体育館。冬でも野球や

サッカーなどの屋外スポーツが楽しめます。アリーナ部分の面積は二千平方メートルで、バレーボール、テニス、ミニサッカーのコートが二面ずつとれる広さ。

(五) 皆楽公園

水と緑が調和した自然公園、町民の憩いの場として利用されています。二七畝の広大な敷地に、遊水池、ボート、バンガロー、バーベキューコーナー、キャンプ場があり、水洗トイレも完備されている。また、ヘラ鮎釣りのメッカとして、多くの太公望が集まっている。

(六) みのり工房

農産物加工施設みのり工房では、おもいきり太陽と大地の恵みのため込んだ真っ赤なトマト「月形産桃太郎」を使用したトマトジュース「おはようトマト」を製造しており、全国の皆様に愛飲されている。(製造実績平成十四年度三一九、五九〇本)

イベント

(一) 月形夏まつり

真夏の暑い季節のお祭りでは、例年花火大会や、音楽演奏、ゲーム大会などで盛りあがっている。皆楽公園エリアで行われるためキャンプや温泉の計画と一緒に、また、子供の夏休みの行事として遊びにいつては。

(二) メロンジャム

アマチュアバンドの音楽祭。参加を希望するバンドも多く、選考された選りすぐりのバンドにより、ノリノリのジャムセッションが展開されます。

(三) つきがたSNOWフェス

ティバル

冬の寒い日に野外で行われる雪中運動会、真冬の花火大会をはじめ「A.L.L北海道ウィンターザン選手権」「スノーフラッグス」「雪中綱引き」など多くの競技が開催されます。

まとめ

今回レポートした月形町は寒冷地の北海道で花がつかれるとは考えなかったという、そんな時代に花づくりが始まり、以来三〇年「花の里」として開花したまちである。米・花を中心とした農業と、観光で町・商工会・JA・町民が参加して、開かれた協働のまちづくりを目指している我が故郷が、住み良い豊かな街に発展することを願っています。

終わりに取材に、協力頂きました町役場、月形振興公社、JA月形町の皆様にお礼申し上げます。

レポート

地域農研 特別研究員

佐々木正幸

徒然 つれづれ



一本の庭木が 偲ばせてくれたこと

きたの だいぢ

庭木の移植はなかなか骨が折れる。
華奢に見えても、奔放に張り出された
根は大地をしっかりと捕らえ、容易には
掘り起こせないものだ。

◆
思い立ったが吉日というが、その時分
にはたいがい緑が深くなっている。ス
コップを片手に、流れる汗を軍手の甲や
シャツの袖で拭いながらの作業は羽子
板遊びの、さながら負けゲームを連想さ
せる。ことに悲惨なのは眼鏡使用者だ。
額や頭からの汗が眉毛のあたりで一旦
ダムを作り、それが堰を切って一拳にレ
ンズ上を突っ走り、視界不良を招くが、
腰にぶら下げた手ぬぐいは既に汗を引
き延ばすしか芸が残っていない。

暑い盛りは移植の適期ではない。この
時期では樹勢をそぎ、こじらせてしま
う。計画的に根回しを施せばさほどのこ
ともないのだが、怠ると丁寧にさばいて
も根を素っ裸にしかねない。根回し
上手? も、我がこととなるとその語源

すらも忘れてしまっているようだ。

◆
芝生に寝転がりゆったりと流れる雲
を眺めながら、先人たちのことを思い浮
かべていた。大きな不安を抱えつつも、
それをしのぐ夢を描きながら北海道の
開拓に挑んだ人たちは、いかな千辛万苦
に遭遇したものか。たかが幼木の移植が
ごときで難儀している者が軽々しくは
語れないのだが、汗だくになり肩で息を
している姿は何よりも雄弁だ。

◆
そのように思うのも祖父が明治三十
五年、二二歳のときに十勝に入植したか
らである。祖父は明治十三年に岐阜の稲
葉郡で生をうけた。次男だったことから
大工に弟子入りし修業していたが、次第
に新天地に鋤を下ろす決意を固め、母親
と二人で渡道した。

◆
たどり着いたところは、十勝川支流の
河川沿いだった。川は大きく蛇行し弧を
描いた内懐に二〜三ヘクタールの用地



徒然 つれづれ

を求めた。そこは鬱蒼たる森林、大人でも抱えきれないほどの太い榆の木が林立していた。機械力はおろか畜力さえもなく、用具は鋤と鋸だけだった。繁茂のほどは定かでないが、農耕地を求めての作業は巨木の枝打ちから始まった。切り倒しても巨体が横たわっていた。しばらくの間は、寝そべる大きな図体や切り株との同居生活を余儀なくされたのだろう。太い幹を切断し運び出しはじめたのは四〜五年経って馬を入手してからだ。降雪を待つて引きずり出したに違いないが、なおも、切り株がどっしりと構えていた。本格的に掘り起こし始めたのは、さらに時を経てからであり、戦後になってもその名残をとどめていたほどである。

◆
わずか一本の庭木が、一世紀も前のことを偲ばせてくれた。先人たちは大いなる挑戦をし、原始の森を切り開いた。そして、稔り豊かな大地を残した。

感慨に浸りながらも、「我々は何を残せるのだろうか？」と脳裏をよぎった。指示待ち人間が多いと揶揄されるいまどきのこと、ことさらその思いが強い。



■ ■ ■
特別寄稿をいただいていた碓田素州さんが、一時充電期間をとるごことになりました。食文化にかかる数々の話題を提供いただき、毎回次号を楽しみにしていた読者の方も多く残念ですが、再登場に期待しましょう。
今回から、「つれづれ」という新コーナーで、きたのだいちさん、八坂里四さんに代わる代わる寄稿いただくこととなりました。おたのしみに。

月例研究会開催の予告

掲示板

北海道農業研究会（国際部会）の招きで来札される中国農業部の黄連貴氏には、多忙な日程のなかで当研究所の月例研究会にも講演していただくことになりました。

同氏は、供銷合作社などの既存組織では開放経済下の農村の動向に対応出来ないとして、日本型の農協システムの導入を積極的に進めている一人です。

世界の農村組織を周到に調査し、日本型農協に的を絞ってきたのは何故だろうか。

中国の農業事情について見識を広げる機会であるとともに、日本の農協について、その価値の再発見につながる講演になることを期待しています。

記

- ①開催日時 2月9日（月）14:00～17:00
- ②開催場所 JA北農ビル19階 会議室
（札幌市中央区北4条西1丁目）
- ③テーマ 「WTO体制下の中国農業と
農協づくり」
- ④講師 中国農業部農業合作経済司処長
黄 連 貴 氏
- ⑤参加費 無 料

編集後記

昨年は冷害による深刻な打撃を受け、今年は何とか良い歳となりますようにと祈る先から、台風並みの低気圧により道東を中心として全道的な大雪にみまわれまし。北見は観測史上で最高の積雪（一七〇cm）となり、都市機能が麻痺したとニュースが伝えていますが、今のところ報じられていませんが、農業関係の被害が少ないことを祈っています。

言い伝えどおり「大雪の歳は豊作」と、農家は「曇をも抱む」心境であろうと察せられます。スキーを趣味とする私にとっては、農業関係者としては不謹慎と言われそうですが、「待ってました」と叫びたくなる大雪でした。スキー場にとって今シーズンは相当の収入減を覚悟するほど、今まで降雪が少なかったのです。「あちら立てればこちら立たず」ですね。

DATA FILE

関連事項/ DATA

月形町

〒 061-0592

樺戸郡月形町 1219 番地

☎ 0126(53)2321

JA 月形町

〒 061-0592

樺戸郡月形町 1069 番地

☎ 0126(53)2111

(社) 北海道地域農業研究所

〒 064-0004

札幌市中央区北 4 条西 7 丁目 1

☎ 011(281)2566

E-mail : kaihou@chiikinouken.or.jp

HP : <http://www.chiikinouken.or.jp>



(奈良孝一)

何事によらず「ほどほど」が一番なのでしようが、異常気象とはどの程度のことを指す言葉なのでしょう。百年に一度の大雪であっても、「百年に一度は大雪があるのが普通」と考える歴史的スケールからみれば、特に異常ではなく当たり前の状況といえます。ここ二、三年とは違うから異常だというのはあまりに近視眼的です。この天候は気短な私に、「もっとおおらかに、もっとしたたかに」と語りかけてくれました。

一三〇年ほどですが、道内各地でもてなされる故郷自慢の一品は、祖先が生まれ育った道外の郷土料理が色濃く反映していると言えましょう。正月の雑煮も、丸餅・切り餅、餅を焼くか否か、昆布だし・鰹だし・鶏ガラスープ、塩味・醤油味・味噌味の加減などなど、各地各様で中に入れる具材まで吟味するとそのバラエティは家庭毎に異なっていると一言しても過言ではないでしょう。「北海道はこれが定番」といった雑煮が生まれるのは何年先でしょうか。

建国二〇〇年程のアメリカでさえ、自慢できる自国料理は育っていないというのが私の感想です。もてなしは、フランス料理であり、アメリカ独自の家庭料理と言えるものを私はほとんど知りません。一方、ケンタッキーやマクドナルドに代表されるファストフードはアメリカ発の食文化としてつとに有名です。

また、世界の有名な料理は、そのほとんどが王侯貴族を中心として発達したものであることは否めない事実です。世界的には民主主

義国が大勢であり、食文化は今後どのように進化するのことも興味があります。

最近流行のスローフード運動ではないですが、私は北海道の食文化を「慌てず、焦らず、じっくり」と育てていかなければならないと気負い込んでいます。といっても、妻のため？休日には、北海道に相應しい「百合根饅頭」作りに挑戦している昨今です。

エーコーブ
くみあい 高度化成肥料

くみあい 粒状配合 (BB) 肥料



稔りある大地とともに

ホクレン肥料株式会社

代表取締役社長 富井 淳

札幌市中央区北4条西1丁目1番地 (北農ビル18F)

TEL 代表 (011) 222-2444

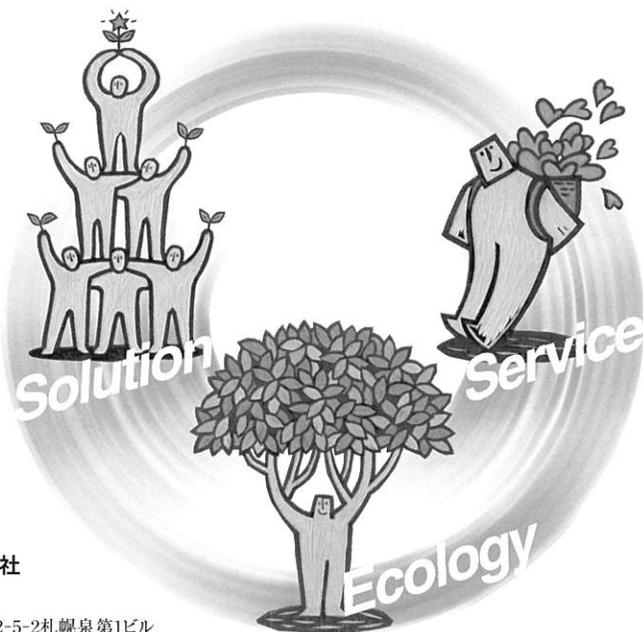
FAX (011) 232-3597

豊かな地球社会のために——
ソリューションとサービスで
お応えします。

富士電機は、地球環境の保護に役立つ新技術の開発に取り組んでいます。

その成果は、おいしい水づくりや川や海を汚さない水処理システムに、大気の監視や空気をきれいにすることに、新エネルギーの活用、省エネルギーの推進などに活かされています。

そして最新のIT(情報技術)を結集して、社会や企業の信頼できるパートナーとして、お客さまに最適なソリューションとサービスでお応えします。



富士電機システムズ株式会社
北海道支社

〒060-0031 札幌市中央区北1条東2-5-2 札幌泉第1ビル
TEL (011) 261-7231 FAX (011) 221-8043
URL <http://www.fesys.co.jp>

ご存じですか?

「公社草地リフレッシュ事業」

- ★ 補助事業で対象とならない草地の更新
- ★ 2ヶ年分割施工もOK
- ★ 資材は農家の皆さんで用意
- ★ 施工費は98,000円/ha ~ 88,200円/ha
(平成15年度公社草地リフレッシュ事業標準施工費)
- ★ 申し込みは農協へ



播種床造成省力化に威力を発揮する
パワーハロー

詳しくは農協又は各支所へお問い合わせください

財団法人 北海道農業開発公社

本所 〒060-0005 札幌市中央区北5条西6丁目1番23
TEL(代表)011-241-7551 FAX011-271-3776
ホームページ <http://www.adhokkaido.or.jp>

- | | | | |
|-------|--|-------|---|
| ■道央支所 | 〒068-0025 岩見沢市5条西5丁目2番地1 空知農業会館
TEL0126-23-2178 FAX0126-23-4260 | ■釧路支所 | 〒085-0018 釧路市黒金町12丁目10番地 釧路農業会館
TEL0154-22-1538 FAX0154-25-4798 |
| ■上川支所 | 〒070-0030 旭川市宮下通14丁目右1号 上川農業会館
TEL0166-25-2613 FAX0166-26-3464 | ■根室支所 | 〒086-1006 標津郡中標津町東6条南1丁目2番地 根室農業会館
TEL01537-2-3296 FAX01537-3-2080 |
| ■道南支所 | 〒040-0015 函館市柴川町1番5号 日聖ビル
TEL0138-55-3005 FAX0138-55-3191 | ■北見支所 | 〒090-8650 北見市とん田東町617番地 北見農業会館
TEL0157-25-2826 FAX0157-25-9188 |
| ■日胆支所 | 〒053-0021 苫小牧市若草町5丁目5番3号 日胆農業会館
TEL0144-32-8171 FAX0144-32-3215 | ■道北支所 | 〒097-0001 稚内市末広4丁目2番31号 宗谷農業会館
TEL0162-33-3321 FAX0162-33-7339 |
| ■十勝支所 | 〒080-0013 帯広市西3条南7丁目14番地 農協連ビル
TEL0155-24-0254 FAX0155-24-0261 | | |